懇望して、患難憂苦來れば、卽ち、欣然として喜びて忍ぶなり。使徒等は實に、此階級に位しける者なりけり。されば、ころ言へることあれ「耶蘇の聖名の爲恥辱を受くるに至りたれば、喜びて司祭長等の集會を去りぬ」と（Act.5,41.）なり。又曰く「余、患難の中にありて、慰に滿ち、喜に溢れたり」と（2 Cor.7.4）なり。ペプレア人等の天主の爲虐待せられしを、使徒聖者ポーロは稱譽して曰はく「爾曹は、別に愈美はしくして、恒に存ふる貨財あることを知りたれば、ころ、此貧財を奪はるゝことを喜びて忍びたりけれ」と（Heb. 10, 34.）云へり。吾曹も、天主の聖寵の助力を獲て、欣然として患難を忍ぶに至らんことを、專ら勉めざる可からず。使徒ジャコブ曰く「吾兄弟よ、爾曹の遇ふ誘惑は皆歡樂の源因なりと思へ」と（Jac.1,2.）云へり。天主の降し給へる患難は皆變りて平和とならんまでは、誠に天主の聖旨に叙合せずばある可からず。聖者グレゴリオ曰く「若し吾曹の心、緊しく天主の聖意に親合し奉らば、艱苦も歡喜と覺え、憂愁も安樂と感じて、益く今世を逝りて、後世の眞福を受んと、懇願するに至らん」と（Greg.L.7moral.c.7）云へり。

五　セナの聖女カタリナは、主基督に授り奉りて、基督教の完德を多く記錄しぬ。中に最も殊勝なる聖言あり「眞珠の螺鈿にある如く、蜜蜂の巣房にある如く、吾心に潛伏して、如何なる緣故出來すとも、出ることなかれ」と曰へることなり。聖女初めは、聖心の狹小を感じたれども、漸にして廣濶を覺えて苟も、出でず、終に天福の中に逍遙するに至りき。卽ち、世俗に在て孜々として、數十年勉むとも、脩め得可からざる完德を、暫時にして脩め得たりき。吾曹も、常に聖心に潛伏せざる可からず。言へることあり「我愛しむ郎は、我に在し、我は彼にあり」と（Cant.2,16.）なり。言短簡なれども、意は、深遠なり。終身味へども盡さず。深く心に銘し、常に口に誦へて、苟

も措く可からざる言なり。

第十三章　基督信者は、身位、職業の貴賤に關らず、天主の聖旨に、密しく翕合せざる可からず。

一　吾曹基督信者は、天主の攝理の任け給へる職業、與へ給へる身位に安じて、專ら天主の聖旨に翕合し奉らざる可からず。聖者パジリオは、賤職を貴重して、淳々盡さんことを、吾曹に奬勵せんと欲して、耶蘇基督の聖範を擧示して曰く「實に吾主は、賤業を甘じて盡し給ひぬ。曾一たび、弟子等の足を洗ひ給へるのみならず、身を終るまで聖母マリアと、養父聖者ジョゼフとに從ひ給ひて、其命を聽き給ひて、萬事丹誠を凝して行ひ給ひたり。斯ればこそ聖史は十二歲より三十歲までの事は、彼等に循

ひ給へり」と（Luc.2,51.）のみ記しぬれ」と（In reg. fus.disp. pet. 7.）云へり。聖母マリア、聖者ジョゼフの一家は、最貧かりければ、主基督は、兩聖に循ひ、賤業を盡して、其生計を助け給ひたり。聖者オグスチノ曰く「基督信者にして、基督の行ひ給へる業を行ふことを、豈厭ひて可らんや」と（Aug. tract.58 sup. Joan.）云へり。天主の聖子は、吾曹を愛しみ給ひて、吾曹の爲賤業を盡すことを、厭ひ給はざりき。吾曹は、天主の聖子の爲、如何賤業を盡し奉ることを、厭ひて可らんや。必用あらば生命をも、抛たざる可からず。

二　己の職務と身位とに安じて、不平を鳴さじと欲すれば、其職務も身位も、天主親ら賜へるなりと、確信するに如かず。既に、第四編第五章及、第三編第八章にも、述べたる如く、職務の如何を顧みず「此職務を盡すは、天主の聖旨なりと、確信して盡せば、安慰、歡喜を得ん」「天主、是を余に行せんと欲し給へば、余、是を行ひ奉れば、天主の聖旨を行ひ奉るなり。天主の

聖旨を行ひ奉るより高妙、深邃なることなしと推思せば、豈他に之より吾曹の靈魂を喜悅滿足せしむる者あらんや。吾曹は萬事に、此見識を應用して、敢て善否を分たず、貴賤を擇ばざれば、職務、身位の尊卑をも、思はざるに至らん。

三　聖者ヒエコモの記しる事あり。正しく此義を證せり。聖者曰く、「余、一日、隱脩院を訪ひぬ。一位の脩士あり。院長の命に因て、日々二回、一里餘の遠地に、重量の石を運びて、既に十八年を經ぬと云ふ。必要ありて運ぶにもあらず、又他に重要の目的ありて、運ばしめらるゝにもあらず。曾長命に從ひて、私見を制へんことを敎へ、其立つる摸表を以て、他をも敎へん目的あるのみなりき。其恭順の價と功績の美とは、知る者なし。知れども傲心深き者は、此德功の清淨、高妙なる點は、視ること能はず、小兒の遊戲の如しと、思ひて輕視せり。余も、最深く異しみて「如何なる感情あり

てか、斯する」と問へば、卽ち曰く、「此石を運びて、余心に感ふる滿悅は、命せられて他の重要なる事を、正しく盡し得て、感ふる滿悅と異ならじ」と、答へけり。余、此言を聽き、大に覺悟して、脩士の實業を爲し始めてき」と（Ex. reg. monach. c. 12）云へり。故に基督信者は、職務の外面を見ず、內容卽ち、天主の聖旨の行はれ給はんことを、視ざる可からず。天主の聖旨の行はれ給はんことをのみ視て、外視せざれば、美味を以て身体の養はるゝ如く、天主の聖旨を以て、心を養はれて、著しく完德を脩り得ん。

四　「何事にも、天主の聖旨を行ひ奉れば、大に完德の妙境に進み得べしと、雖も、更に高尙の職業を盡して、聖旨を行ひ奉りて、更に完德の峻嶺に登んと欲す」と曰ふ者あり、是其私意を行はせ給へと、天主に迫り奉りて、天主の聖旨に讓任し奉らざる者なり。抑吾曹は、天主の命じ給へるとを、丹誠を凝して、行ひ、專ら天主の聖旨に翕合し奉ることは、爲とも、天主

に命じて、吾曹が欲する事を、行はせ奉ること能はず。聖者オグスチノ曰く「主よ、主の命じ給ふ事は、余欲する事なりや、否やを究めず、主命じ給へば、專ら盡し奉る者こそ、本分を盡して、主に事へ奉つる者なれ」と(Aug. L, 10 conf. c. 26)云へり。俯院長ニーロ曰く「汝の欲する事の、行はれんことは祈らず、天主の聖旨の、行はれ給はんことを禱れ」と(Nilo. c. 29 de omt.)云へり。

五　要點あり。憂苦、患難ある時應用せば、必ず益あり。即ち、憂患の大小と、之を忍ぶ方法との難易は、天主の選定し給ひて、吾曹の選定することを得ざることと是なり。天主の選定し給へば、吾曹は此は防ぎ易く、彼は防ぎ難し。此は忍び得れども、彼は、得忍ばず」と誘惑の大小、輕重を分定し得ず。蓋し、吾曹の忍ぶ事は、吾曹の欲する事なれば、患難、憂苦と見ゐざれば、なり、若し吾曹は、專ら天主の聖意に協ひ奉らんと欲すれば、天主の親ら欲し給ふことを、吾曹にも行ひ奉らせ給はんことを、請ひ奉らざる可からず。天主の降し給へる憂患は、吾曹の意に悖り、性に逆へども、純ら天主の聖意に讓任し奉りて、甘じて忍ばゞ斜ならず。耶蘇基督をこそ學び奉るなりけれ。基督は、己の旨の行はれんことを、天主に請ひ給はず、聖父の聖旨の行はれ給はんことをぞ、請ひ給ひける(Luc. 22, 42.)。吾曹は、身靈を皆、天主の聖手に讓任し奉りて、其吾曹に爲し給ふ事は、時と處に關らず、怨逆、抗抵の念なく、甘じて忍はざれば、全く天主の聖旨に翕合し奉るに至り得ざらん。

六　賢哲ブロジオ記錄せり。魔鬼に誘はれ、患難に遭ひ、憂苦を感じて「天主は無仁なり。無善なり」と曰ひて、大に怨望する者ありけり。聖女ゼルツルダ、其天主の聖旨に悖り奉ることを憂ひて、其爲に、天主の聖佑を請ひ奉りぬ。天主、聖女に語り給はく「汝が、我聖佑を請ひ奉る者に曰へ「憂苦なければ、天の國は獲ること能はず、我降す憂苦を好まずば、擇べと云へ」

と(C.10.Hom.spirt.)云へり。聖女天主の語り給ふ時の狀態と、其金言とに因て「天主の降し給へる憂苦は、救靈に益せず」と謂ひて、自ら憂苦を擇ぶことの、大害あることを悟りぬ。蓋し、天主の降し給へる患難憂苦は如何に重大なるも、如何に嚴酷なるも、皆己を益すれども、害せずと確信して、甘心忍受して、天主の聖旨に專ら翕合し奉らざる可からざればなり。吾曹は、患難となく、誘惑となく、皆甘心忍受して、彼を此をと揀選し得ざる如く、身位、職務も天主の親ら授け給ひて、正しく吾曹に適ひ、大に靈魂を益すれば、私意の好愛、自然の傾嚮に任せて、敢て彼を此をと揀選することを得ず。本分に安じて、精勵すべきにこそ。

七　更に又重要なる要點あり。即ち、純誠なる依賴を以て、全く天主に讓任し奉りて「天主は如何に吾曹を攝理し、如何に整理し給ふかと、知ることを欲せざること是なり。(Blos.c.15 mon.spirit.)主、其僕の忠信を認めて、之を恃まば、家事は皆、委托して敢て疑はず。太祖ジョゼフ曰く「吾主は、事々余に委ねぬ。家に何のあるかを知らず」と(Gen. 39,8)云へり。吾曹も、誠に精に天主に依賴し奉れば、其吾曹を攝理し給ふことは如何と、知ることを欲せざるなり。言へることあり「主よ、吾歷時は、主の聖手にあり」と(Psal. 30,16)なり。吾曹自ら、天主の聖手に、全く讓任し奉りたりと知らば、即ち、確然として安じて、更に探究、推知する必要あらじ。

八　聖者イギ・ンオの敎訓あり。揀選して事を行はん基礎となすに適切なり。聖者は、此敎訓を以て、謙德を脩むる良法として貫びぬ。曰く「謙德を脩むる方三あり。一として完全ならずはなけれども、特に第三方こそ緊要なれ。即ち、最下賤にして、人々輕視、蔑如して顧みざる事業を擇びて、就す。是なり。斯てぞ吾曹は、吾曹を愛し給ふ仁慈の深さ餘に甘じて輕侮、忝辱せられ給ひし耶蘇基督を、學び奉る」と(L.Exerci. spirit.)云へり。賤業

を擇て盡す者は、專ら他の爲にして、己の爲にせざれば、傲慢に誘はれて、自受することなし。賤は、愛と謙とを兼有すれども、貴は、愛のみを單有せり。又謙は、賤業の固有の德なり。故に賤業に就く者は、謙德を專脩し、又愛德をも兼脩し得れども、貴業に就く者は、愛德は脩め得ても、謙德は脩め得じ。貴業は、當注意して願ふ可からざるのみならず、能ふ可くば嫌忌退去せざる可からず。

第十四章　才智の多寡に安じて、主の聖旨に翕合し奉る。

一　吾曹の聰明才幹は、天主の賜なり。天主或は、多を賜ふあり、或は、寡を賜ふありて、均しからずと雖も、賜はりたる分に安じて、天主の聖旨に、全く翕合し奉らざる可からず。蓋し吾曹は、一事には長ずれども、一事には短なれば、其長所を以て、短所を補ひて、節制、讓任することこう緊要なれ。魔鬼は、陰險深し。常に他人の長所と、吾曹の短所を現はして、嫉妬を發さしむ。譬へば、同窓の學友と、或は、公論し、或は、公務を執るが如し。學友、巧に卓說を述べ、公務を盡して、美名を得て、吾に超越するを見れば、必ず嫉妬の念の發るを感ふ。此念は、學友の善を憂へしむるに至らざれども、學友進めども、吾進むこと能はず、遙に其下に在るを視せて、大に恥を懷かしめ、漸々悲哀、落膽せしめて、終に廢學するにも至らしむる者なり。

二　是新奇にあらず、昔より多かりし誘惑なり。ドミニコ會の編年史を閲れば、大師アルベルトも、此誘惑に遇へることを錄せり。(Hist.ord.pre-d. II. 3.c.45.) 大師は、アキノの聖者トマスの師なり。若くして、篤く聖母に熱心しぬ。日々若干の祈禱を誦へて、聖母を尊敬して、其庇護を請ひぬ。其庇護にや因りけん、十七歳にして脩士と成りぬ。頗る遲鈍にして、明悟健

快ならざれば、學事に適はず。學友は進めども、己は進むこと能はずして、怨憤に堪ゑざりき。怨憤に堪ゑざる所に、魔鬼の詭計に遇ひ、心大に狂亂せり。若し奇現なかりせば、修道の美業をも全廢せしならん。一夜のことなりき。一條の梯子あり。修院の牆壁に掛れり。梯子の下端院外に垂れ、上に四位の貴婦人居り。一位は光採威嚴ありて、三位の長たるが如し。大師、梯子を登れば、一婦來て、猛然として推下す。又登れば、一婦又推下す。大師毫も懲りず、必ず志を遂げんと、強て復登れば、一婦復來て、其再三登る所以を問ふ。修友は、駭々として學に進めども、余は、進むこと能はずして、羞辱に堪ゑざれば、還俗せまく欲す」と答ふ。其狀愁然として憐れなりけり。彼婦、光彩威嚴なる貴婦を指して曰く「此、天主の聖母、天の聖后にてましませり。吾曹は其婢なり。格物究理の必要なる明悟を欲せられなば、聖子に求め給へと請へ。吾曹も請はんと曰ひて、聖母の坐下に伴ひき。聖母は、

温顏にして、悅を含み給へり。問ひ給はく「何をか請ふ」。大師、答へ奉らく「吾明悟は遲鈍にして、格物究理の書に通ずること能はず。請ふ、明悟を銳敏ならしめ給へ」。聖母曰く「落膽沮止すること勿れ。常に學びて弛ずば、極めて博學、高識となりて、美名を後世に遺さん」と曰ふ。又曰く「汝の修めん事理は、吾賞賜なれば、他日、公衆を講敎せん時、必ず悉く遺忘せん日あらん」と云へり。大師、此奇現に遇ひて、心裏の喜悅常ならざりき。果して明悟大に開けて、質格物究理のみならず、神學、聖書の蘊奧をも曉り得て、達識なる名師となりぬる。試に其著書を繙き閲ば、其學識の如何なりしかを、證せり。世を逝らん三年前のことなりき。コロニアに在て、公衆を敎導しける時、忽ち事理を遺忘して、述ぶること能はず。今までの活達なる大師、忽ち昔日の遲鈍となりぬ。於是當年の奇現を追憶して、細に公衆に語りて、訣別、退去し、祈禱、默想を以て、餘日を送りぬと云ふ。

三　已上述べたる事は、脩學に關はれども、通有の事として、各人の身位にも應用し得可き事實なり。蓋し、吾曹は、皆天主の賜へ給へる才幹と、身位とに安じて、天主の欲し給ふ事の外は、苟も欲し奉らずして、純然天主の聖旨に、翕合し奉らざる可からざる者なればなり。聖詩に曰く「主よ、主は、吾曹を主の聖誡に向はしめ給ひて、貪婪に向はしめ給はざれ」と(Ps. al.118,36)云へり。聖者オグスチノ解釋して曰く「貪婪は、諸惡の根源なり。此貪婪や、天主の賜へる恩惠と、身位に安せしめず、更に高位、多祿を願望せしめて、吾曹の元祖に其恩惠をも、身位をも失はしめたり」と云へり。吾曹は、おほけなくも神性を貪婪し奉らん亂心の疾、癲狂の病をも元祖より讓れし如く、又痛しくも、己の身位の上に越ねんことを貪婪する亂心の疾、癲狂の病をも讓られたり。魔鬼は、元祖を欺きし蠱惑を用ゐて、吾曹をも欺かんと彼して、天主の吾曹に賜へる地位と、才幹とに安せしめず、

更に高大の地位と、才幹とを貪らしむ。聖者オグスチノ曰く「ダビド聖王は、専ら天主の聖旨に協ひ奉らん忠心を賜へと、天主に請ひ奉りて、自益計謀の貪念をば請ひ奉らざりき。聖王は、財貨、財の貪欲をのみ、貪婪と稱せず、名譽榮華、娛樂の貪欲即ち、肉慾を總稱しぬ。使徒ポーロ曰く「貪婪は、諸惡の根源なり」と(1 Tim.6,16.)云へり」と云へり。

四　天主の賜へる才幹と、身位とに安じて、天主の聖旨に翕合し奉らんと欲すれば、才幹の多寡と身位の貴賤は、天主の聖旨に因れることなる事を、知らざる可からず。使徒ポーロ曰く「同一の聖靈なれども、萬事を行ひ給ひて、親ら欲し給ふ如く、各人に頒與し給ふ」と(1 Cor.12,11)云へり。既に第四編第四章に述たる如く、使徒は、比喩を設けて、信徒を教訓しぬ。其大意は「吾曹の身体は、天主の攝成し給へる諸肢に因て成れり。地位各定れり。足は、手より卑下なれども、怨みて、其地位を奪ふことを努めず。手は

頭に如されども、嫉みて、取て代らんことを謀らず。皆其地位に安せり。天主は、其聖旨のまにまに信徒を排置して、聖會を構成し給ふこと、肢体の一身に於るが如し。各人に各位を定め、各種の職を執らせ給ふなり」となり。斯れば天主、某に手職を執らせ給はゞ、豈頭職を貪る可けんや。口職を執らせ給はゞ、豈眼職を望む可けんや。天主の聖旨は最深妙にして測る可からず。言へることあり「誰か天主の聖旨を知らん」と(sap.9,13)なり。又曰へり「主よ、萬事主より出でければ、主は、萬事に讃美せられ給はん。主は、各人に頒與す可き事を、善く知し召し給へば、如何某には多く、某には寡く賜るかは、吾曹の知るに由なし」と(de imit.L.3.c.22.)なり。吾曹は、明悟淺く、智識狹く、才幹大ならず。或は中等或は、中等に至らずと雖も、常に自負して他人を凌駕す。貴職を授かるを榮とし、授からざるを辱とす。然るを若し、明悟、智識高博にして、才幹廣大ならば、如何あらん。禍をこそ招かめ。箴言

經に曰く「蟻に羽の生ずるは、兇運なり」と云へり。吾曹若し、私意の妄想を脱して正直、丹誠の眼を以て、視察せば、明悟深からず、智識高からず、才幹狹小にして、地位の賤きことを幸福として、時々刻々、天主に大謝し奉りて曰はん「主よ、廣大の才能は、賞揚、讃美を招けども、余此才能なきことを、却て鴻恩とこそ思ひ奉れ」と(de imit.L.3.c.22)云はん。聖者等は、高才、博識の危險なることを、善く認めて、自誇の危險を避けて、謙を愛しみ、驕を憎み給ふ天主の、聖意に協ひ奉らん爲、才識の高博なることを、嫌忌したりけり。吾曹も、天主の聖旨を行ひ奉る外は、皆虚無なりと確信して、吾曹の歡樂を、天主の聖旨に協へ奉るに、至らんことこそ願はしけれ。淺識、短才を以て、天主の聖意に協ひ奉ることを得ば、如何吾曹は、更に深遂の教理、廣博の智識、鋭敏の才幹を求めんとする理あらん。若し事故ありて、求むれば、更に善く天主に事へ奉りて、其聖意を窺ばしめ奉らん爲に、求めざる

可からず。天主は、聖旨に協ひ給ひたれば、こゝ、吾曹を短才、淺智、淵識となし給ひたりければ、聖旨に從ひ奉りて、短才に安じ、淺智を甘じ、淵識を喜びて、天主の聖意に協ひ奉らざる可からず。如何で過望を發して煩悶す可けん。適當と思し、召し給へば、こゝ、天主は、吾曹に此地位を授け給へれ。如何か吾曹は、天主の欲し給はざる地位を欲せん。サウルは、天主に盛大の祭禮を献け奉りつれども、(1 Reg.13,19.) 天主の聖旨に翕合し奉らずして、献け奉りければ、聖意に協ひ奉らざりき。吾曹も、高雅の願望を有つも、天主の聖旨に翕合し奉らずしては、聖意に協ひ奉るまじ。縱ひ、逸才、大智を有ちて、貴職を盡すとも、天主の賜へる才能を善用し、任じ給へる職務を專盡して、篤く天主の聖旨に翕合し奉らずば、德をも脩め得ず、善にも進み得ざらん。

五　身位の貴賤に據ての所爲は、俳優の所爲に似たり。俳優は、王者、貴人の役を演ずるあり。匹夫、乞者の役を演ずるあり。王者、貴人の役を演ずる者も、態度妙に活寫し得ずば、喝採、稱讃せられず、乞者、匹夫の役を演ずる者も、情狀能く寫し得て、正しく、王者、貴人の役を演ずる者に勝らば、喝贊せらる。今世は、舞臺に似て、吾曹は、俳優に似たり。天主は、吾曹の身位の高、を貴重し給はず、盡す職務の聖をこそ貴重し給へ。下位の人、其盡す職務、上位の人の職務に勝らば、貴重、報賞せられん。野人、牧童の役を演じて、喝採、稱贊せらるゝ俳優も、王侯、尊者の役を演ずれば、大に冷評、罵倒せらるゝあり。吾曹も、士卒となり、常人となりて、專ら其職務を盡さば、天主に昵近、寵愛せられ奉れども、文官となり、武官とならば、大に忌彈、嫌棄せられ奉られもやせん。天主は、吾曹の器能に應ひて、(Math.25,15.) 身位と、才幹とを授け給へれば、基督教完德を脩めんと欲する者は、各自の地位、識才に安じて、本分を盡して、他の地位、他の才識を願ふ可からず。斯れば、必ず

天主の聖旨にも協ひ奉りて、受けん報賞をも多からん。

第十五章　疾病の時も、天主の聖旨に翕合し奉らざる可からず。

一、吾曹の疾するも、せざるも、天主の恵なり。天主は、吾曹を試みて、改心せしめ、輭弱を認めしめて、惑を解かしめ、世物の貪戀を割斷して、情慾の傾向を熄滅せしめ、現世は、旅寓にして、天國こそ故郷なれと、認めしめて、歸省の預備を、爲さしめんと欲し給ひて、吾曹を病しめ給ふなり。言へることあり「重病は、靈魂を癒す」と（Eccl.31,2.）なり。隱脩士あり、弟子の病めるを訪ひ、懇諭して曰く「愛子よ、憂へずして、天主に大謝し奉れ。病は火なり。汝鐵ならば、その銹落ちん。金ならば、更に純粹とならん。疾病は、天主の

恩惠なりと確信して、大謝し奉るは、盛德大孝の業なりかし」と云へりき。

二、聖女カラヽ、諸病に侵されて、重痛に沈みけること二十八年なりき。然れども、怨望の色なく、愁歎の聲なく、常に欣然として、忍びて、篤く天主に謝し奉りぬ。臨死前十七日の間は、特に苦痛を重ねて、飲食も羞まず、難みけり。聽罪司祭慰籍して「耐忍せよ」と白へば、聖女「余、聖者フランシスコの教訓を受けて、耶蘇基督の、多大の聖寵を降し給へることを、辨へ奉りてより、病痛も、感じず、悲哀も、苦ならず、苦業も困からず」と（Surius refert in vita eius.）曰へりとぞ。聖女ルドビナの遺表は、更に奇異なり。患者一讀せば、安慰を得、耐忍を增さん。聖女、三十八年の間、常に病蓐に臥りぬ。特に三十年の間は、苟も、臥床を離るゝことと能はざりけれども、謙遜、耐忍を以て潔く忍びければ、天主、著しき愛を現はし給ひて、慰め給へり」と（Surius. t.7, fol.277.）云ふ。

三　輕微の說を爲し、淺近の理を設けて、天主の聖旨に讓任し奉る美行を、妨くる者あり、其理を破り、其說を退けて、天主の聖旨に讓任し奉らざる可からざる理を、明徵すべし。

第一。說ふ者あり「病すと、せざるとは、個人の小事なれば、憂ふるに足らざれども、子弟を煩勞し、一家を損耗する大事なれば、忍び易からず」と云ふ。是、他人には友愛もなし、天主の聖旨に讓任し奉る孝心もなしと、思ふより爲す說なり。說者よ、汝若し、苦樂も、禍福も、皆天主の降し給ふと、確信して、或は、忍び、或は、樂みて、天主の聖旨に專ら翕合し奉らざる可からずば、他も同しく、翕合せざる可からずと、確信せよ。天主、汝を病しめ、他をして看護せしめ給はん聖旨ならば、他は必ず其聖旨に從ひ奉りて、甘じて、己の本分を盡さんと欲す。汝も、天主の降し給へる苦痛を、甘じて忍び奉りて、天主の聖旨に翕合し奉れば、他も必ず甘じて、己の煩勞を忍びて、天主の聖旨に翕合し奉るぞかし。

四　又說者あり「他人は、患者を看護し、勞事を盡して、日々新に愛德を脩む。余も若し、無病にして、其務を盡し、其事を行はゞ、其德を脩む可けれども、今、病みて、欲する事務を、或は、行ひ、或は、盡す能はず、欲する德を脩め得ず、大に憂ふと云ふ。聖者オグスチノ答へて曰く「欲する事を行ひ得て、益するか、行ひ得ずして益するかは、吾曹の知り得ることにわらず、吾曹の器能に從ひて、行はんことを決定して、其決定しゝ如く、行ひ得て、本望を遂ぐるとも、喜ばず、唯天主の欲し給ふ事を行ひ得て、喜び、行ひ得ずとも、心を亂し、和を失ふ可からず。蓋し、吾曹は、精誠を凝して天主の聖旨を行ひ奉りて、吾曹の旨を天主に行ひ給はしめ奉る可からざればなり」と（Catechis.rud.14.）云へり。又曰く「人智の究むる事を行はんより、寧ろ天主の全能の禁じ給ふ事は行はじと、備ふる人にわらざれば、自ら行はんこと

を整定すること能はず」と(Id.ub.supra)云へり。常に吾曹は、偏意なく中立して、行はんと決定しゝ事の、天主の聖旨に協はずば即ち、措きて、天主の聖旨に翕合し奉らん準備を、爲さる可からず。或は病に侵され或は、意外の事に近づいて、決定しゝ事を行ひ得ず、天主に事へ奉ることも、他人に益することも、能はずと雖も、毫も憂慮、傷心す可からず。師父アビラ書を、有病の司祭に贈りて曰く「爾、健にして行ひ得る事も、病みては、行ひ得ずと思ふことと勿れ。病みて、善く天主の聖旨に翕合し奉らば、善く聖旨に協ひ奉れり。思へ。爾若し、天主の聖旨の行はれ給ばんことを、純ら求め奉らば、病むと、病ざるとは、何ぞ擇はん。蓋し、天主の聖旨は、常に吾曹を益し給ひて、健なるにも、病めるにも均しく行はれ給へばなり」と(M.Avila t.2.epist.)云へり。

五　古聖ジョブ曰く「主の欲し給へる如く、事は成れり。主の聖名は、祝

せられ給ひなん」と(Job.1,21.)云へり。聖者キリゾストモ曰く「ジョブの誠精を盡して、天主の聖旨に翕合し奉りて、病苦を忍び患難を嘗めて、樹てし功績は、無病息災にして、潔く善工を盡して、樹てし功績よりも大なり。吾曹も若し、病みて天主の聖旨に翕合し奉らば、健にして、潔く善工を盡すよりも、多大の功績樹たん」と云へり。聖者ボナベンツラ曰く「善工を盡すとも、患難を忍ぶには如ず」と(Bon.de grad.virt.c.42.)云へり。蓋し、天主は、聖會の成功を俯めんと欲し給へば、親ら俯め給ひて、吾曹の善工を要め給はざればなり。ダビド聖王曰く「余、主に曰ひき。主は、吾神にて在す。主は、吾善工を要め給はずと、云ひき」と(ps.15,2.)云へり。天主は、吾曹を病しめ給ひて耐忍、讓任等の德を俯めしめ給ふ。吾曹は、已に何の適應するかを知らざれども、天主は、細に知し召し給へば、知し召し給ふ如く、行ひ奉りて、苟も逆ひ奉る可からず。吾曹は、某事を行はんと欲して、健康を天主に請ひ奉ら

ば、愈正しく天主に事へ奉りて、愈善く聖旨に協ひ奉らん爲、請ひ奉らざる可からず。吾曹の病みて、苦痛を忍ぶことの、健にして善工を盡すより、天主の聖旨に協ひ奉らば、吾曹は、病まん。聖旨は、斜ならず行はれ給ふべし。吾公教會の初期宣教師の必要多き時すら、尙天主は、使徒聖者ポーロを、滿二個年も幽居せしめ給へり（Act.28,30.）。吾曹は聖會に、毫も必要なしとは、言ふ可からざれども、豈使徒の躅跡を、瞰覽し奉るにも及ぶ者なからんや。天主吾曹を病床に若くば、二個月若くば、二個年若くば、身を終るまで、幽居せしめ給ふとも、何の異しき事かある。

六　聖者オグスチノ嘗て、四旬節中、大齋せざる可からざる義務ある由を述べたりき。病みて、此義務を荷ふこと能ざる者をも、諭して曰く「他は、大齋すれども、己は爲す能はずば、其能はざることを、悲歎、哀痛して食へば、可しと」（Aug.sermo.27.）云へり。忠節の士、負傷して、出戰すること能は

ずば、心中の憂苦は、治療の苦痛より大なり。基督信者も、病して教友と均しく、聖會の六誡を遵りて、義務を盡すこと能はずば、病苦も憂ふ可けれども、義務を盡すこと能はざることを、憂ふ可し。天主は、自築を宏大にし、吾曹の靈益を多大にせんと欲し給ひて、疾病も、變災も降し給へるなりと、確信して、忍受せざる可からざれば、疾病も、變災も吾曹を、天主の聖旨に、翕合し奉らしめ得る者にこそ。

七　聖者ヒロニモ記錄しぬ、「隱脩士ありけり。長病に罹りぬ。脩院長聖者ジョアンに「快復せしめよ」と請へり。聖者從容として曰く「汝緊要の貴物を、棄てんと欲するか、下劑の腹中の分泌を降して、身体を清潔ならしむる如く、病若も、靈魂の罪銹を煉磨すなり」と（Hier.in vita patr.）云ひしとぞ。

第十六章　天主の全能に依り奉りて、專ら爵士のみを恃まず。

疾病にも、疾病に因て生ずる患難にも、天主の聖旨に翕合し奉らざる可からず。

一　聖者バジリオ曰く「醫師を恃み、藥劑に依るべしと雖も、アザ王の如くす可からず。王は、醫藥を專ら恃みければ、聖書は、王の所爲の不可、失當を責めて「病みて、主を求め奉らず、專ら醫術に頼れり」と(2.paral.16,12.)嫌せり」と(Bas.in Reg.ejus disput.55.)云へり。疾病の痊ると痊ゑざるとは、全く天主に歸し奉りて、藥石、醫術に歸す可からず。天主は、親ら欲し給ふ所に隨ひて、或は痊し給ひ、或は痊し給はざれば、病危篤にして、藥石の施す可きなく、醫術の頼る可きなしと雖も、沮止、落膽す可き理なし。昔救世主基督、病を痊し給へる狀一ならざりき。「我欲す、清れ」と(Matth.8.3.)曰ひて、痊し給へるありき。地に唾きして泥を作りて、瞽者の眼を塗り、シロエの板襆池に洗せ給ひて痊し給へるもありき。醫藥を多く用ゐさせ、金銀を多く費させ給ひても、痊し給はざるもあるありき。吾曹の病も、醫藥に依らず、純全痊し給ふあり。醫藥に依て痊し給ふあり。山の如く良藥を多く用ゐさせ給へども、終に其効を出さしめ給はず、全く自己の全能に依せ給ひて、痊し給ふあり。往昔エゼキア王、癰を病みぬ。預言者イザイア、無花果の糊劑を貼けて、痊しぬ。王は、藥能に歸せずして、天主の全能に歸し奉りたりき。(4 Reg. 20,7.) 吾曹も、痊ゆとも、專ら醫士の勉勵、藥劑の効能のみに歸せず、天主の全善、全能に歸し奉らざる可からず。天主は、全能にて在すなり。窮輕重に關らず、欲し給へば卽ち、癒し給ふ。言へることあり「彼等を癒しゝは、草にもあらず、蒸溜にもあらず、主よ、主の金言なり。主の金言は、萬事を癒し給はん」と(Sap.16,2.)なり。病みて痊ゑずとも、藥能を貶し、醫士を咎ひ可からず。癒ゆると、痊ゑざるとは、唯天主の聖旨なり。天主欲し給は

ざれば、癒し給はず。

二　疾病再發すれば、即ち、世人常に云ふ、「醫士の眼識病性を究め得ず、治療を誤てり。看護者の注意足らずして、再發せり」と云ふ。然れども、醫士の治療、看護者の注意當を失ひて、再發せしも、天主の爲しめ給へるなりと、吾曹は、確信して忍びて、醫士をも、看護者をも、咎む可からず。蓋し治療も、看護も、誤らずと、云ふことはあらざれども、天主の放任し給はざれば、偶然誤ると、云ふことあらざればなり。老ドビア疲勞して眠りぬ、燕巢の下なりき。燕糞落ちて、ドビアの眼に入り、ドビアは、醫者となりぬ。此事偶然に似たれども、天主の聖旨に出でし確然なる事なり。言へるごとあり「聖者ジョブの如く、耐忍の摸範を、子孫に遺さしめんと、欲し給ひて、此患難を余に降し給へり」と（Tob.2.12.）なり。天使ドビアの盲眼を癒し給ひて、懇々諭して曰く「汝、天主の聖旨に協ひ奉りたれば、主は、此患難を以て、汝

を試み給へり」と（Tob.12,13.）云へり。

三　師父等の傳記を閲れば、脩院長ステファノの事あり。院長病みける時、脩士乾糕を製調して進めぬ。誤りて橄欖油を用ゐずして、麻油を用ゐて又、ゐたり。麻油は最苦きものなり。院長少く食ひぬ。脩士、又、麻油を用ゐて又、他樣の乾糕を製調して進めたり。院長、又、少く味ひて、食はざりければ、食はしめんと欲し、自ら味ひて、甚しく苦味を感じけり。大に驚きて「余は、毒殺者なり」とぞ叫びける。院長慰籍して曰く「愛子よ、煩ふこと勿れ。天主放任し給はずば、汝誤り得んや」と云へりとぞ。醫士誤診し、看護解怠せしが故に、正反の藥を進められけれども、天主の聖旨に讓任し奉りて、快く服み潔く忍びたる聖者等の摸表多し。吾曹も、此等の摸表を傚ひて、醫士の診察、看護夫の執務當を失ふとも、耐忍して醫士をも咎めず看護夫をも責む可からず。

四　患者其近へる事は、順となく、逆となく、皆天主の降し給へると確信して、甘じて忍はゝ、善德自ら、外容に顯はれて、訪者の善表となるなり。

五　聖詩に曰く「主よ、主は聖旨を盾として吾曹を衛り給へり」と（Ps.13.）云へり。聖者キリゾストモ立言して曰く「吾曹の現世に在るは、戰場にあるが如し。武器を携帶して、常に準備せざる可からず。康者も病者も、均しく、備戰の義務を荷へども、特に病者なり。病時には、身体の疼痛、心裏の悲衰は、靈魂を圍み、心意を亂し、魔鬼は、耐忍を破り、怨言を吐かしめんと誘へばなり」と（Chrys.in illo verbo Ps.3.）云へり。古哲セチカ曰く「病床に在て、疼痛を忍びて、現はす勇敢は、戰場に在て爭鬪して、現はす勇敢より大なり。蓋し、勇敢は、壯乎として戰ふよりは、斷乎として堪ふることに現はるればなり」と（Epist.70.）云へり。言へることあり「耐忍なる人は、勇敢なる人より強し。自己に克つ者は、敵城を破ぶる者より強し」と（Prov.16,32.）なり。

第十七章　聖賢の遺表を述べて、前章の事實を證す。

一　一日のことなりけり。耶蘇基督聖女ゼルッダに現はれ給ひて曰く「病と、康と、何れかを得せしめん。擇べ」と云へり。聖女慇懃として、答へ奉りて曰く「主よ、主は、吾望ひ奉らんことは措きて、顧み給はず、惟主の聖旨を余に行はせ、光榮を弘大にし給へ」と（Blos.c.11mon.spirit.）云ひしとぞ。

二　カンツリアの聖者トマスを、深く恭敬する人ありけり。重病に罹りぬ。聖者の墳墓に詣でゝ「主に代禱して恢復せしめよ」と懇請しければ、病立に痊ぬ。一日、謂へらく「余、吾病の救靈に益するや、否やをも究めず

して、安に恢復を請へるにはあらざりしや」と云へり。此念想、日夜去らず、漸々増長しければ、又聖者の墳墓に詣で「病みて、救靈を益するとならば、病しめ給へ」と、天主に禱らんことを、請ひぬ。病再發しき。即ち病は、救靈の益なりと認めて、心大に滿悅しけりと。(Maurul.L.5.c.4 etyac.de voragine.) 云ふ。

三　司教聖者ウエダストの傳記を閲れば、盲者の摸範あり。一日、聖者の遺骨移轉せられぬ。盲者あり、一見せんと懇望しければ、眼忽ち開きて、熟視することを得たりき。暫くして謂へらく「物を見て樂ひより見ずして、靈魂を益すれば、復、盲者となるに如ず」とて、天主に懇請し奉りて、復、盲者と成れりとぞ。

四　大司教聖者アダナジオは、脩院長聖者アントニオの助力に頼て、當時流布の異端を排斥せんと欲して、アレキサンデレア府に、聖者を懇招しき。聰明、博識の盲者ありけり。ヂヽモと言ふ。院長會談して、未だ聞さる聖書の奥義を多く聽きぬ。院長其博識を感賞して、且問ひて曰く「汝不幸にして盲者となり、物を見ることを能はず。恨みずや」と云ふ。盲者羞て答へず。再三問はれて「大に恨む」と答ふ。院長曰く「汝の聰明博識は、無比の寶物にして、使徒等、か又は、使徒等に均しき大聖かにあらざれば、有たず汝、此大聖等と均しくして、物を有つことを喜ばず、蠅蟻、微虫等と均しくして、物を有んと欲することろ、異しけれ」と(Hies.epirt.ad castr.coecum.)云ひしとぞ。聖者ヒエロニモ曰く「肉眼ありとも、靈眼あるに如ず」と云へり。

五　珍事あり。聖者ドミニコ會の史乘に記載す。聖者ドミニコのローマ府に滯在しける時、有德の婦人あり。其名をボーナと言ふ。其名義を譯せば、美善と云ふことなり。名は實の賓なり。ボーナ婦人の行ふ其名に違はざりき。婦人癌を病みて、最危篤なり。ラテラの聖者ジョアン門塔に伏す。天主の默示を蒙り奉りて、病苦増加すれども、心大に安靜せり。初は乳

房僅に病みしが、後は、漸く全胸腐敗して、臭氣頻に發し、蛆虫其中に生じて蠢動、咬拆す。見る者、他人なからも苦痛に堪ざるに、ボーナ婦人は、此疾患は、天主の賜へるなりと、確信して、常に感謝の念を增長し、喜々、歡々として、忍びて、高く德に進みたり。聖者、哀隣に堪ざず、屢訪ひて、告解を聽き、聖体を授けゝり。一日、聖体を授け、靈事を懇談して「瘢痕を見せずや」と請へば、ボーナ婦人、固く辭みぬ。強ひて請へば、即ち見せぬ。胸膛腐敗し膿汁滿溢して、衆虫蠢動する狀、痛洋、苦海に沈むが如し。然れども、ボーナ婦人は、和顏諂々として、善く忍びぬ。聖者、惻隱の心、恭敬の念、切に發り、瘢痕の敗物を得て、遺物として、永く存たんと欲して、再三請へども、聽かず。一見して還さんと言へば、還すと言へるを聽き、辛くして承諾しぬ。ボーナ近來、常に蠢虫に咬るゝことを非常に樂しめり。一虫床下に落れば、即ち、常に快々として、下りて、自ら取て瘢中に放ち、一匹も棄てざりき。ボーナ、

一虫を取て聖者に與ふれば、忽ち、眞珠と成りぬ。聖者を伴ひし脩士、大に異みて「眞珠なり、還すこと勿れ」と曰ふ。ボーナ「速く、吾眞珠を還されよ。遲滯すること勿れ」と曰ふ。聖者還せば、即ち、復虫となりぬ。此虫、乳房に生長しぬ。ボーナ又、乳房に置きぬ。聖者、ボーナの耐忍、主愛の深きを感賞して、經を念じ、福を降して歸れり。聖者、梯子を降り去れる比、ボーナの胸膛、腹汁も、腫瘍も、蛆虫も忽ち失せて、苦痛も感ずなりぬ。ボーナ、數日を經て全癒して、感謝に堪へず、天主の其僕、聖者ドミニコを使用し給ひて、此奇事を行ひ給へることを、万民に公布せり」(Chroh.ad praed.1.P.I.6.c.49.)云ふ。

六　聖者ドミニコ會史に又記す。脩士ありけり。レジナルドと云ふ。聖者ドミニコに入會を請ひぬ。聖者允許す。未だ期に至らず、熱病に罹る。醫士「是は、治ゆまじ」と云ふ。聖者大に憂ひて、天主に、患者の快復を請ひ奉れり。聖者又、聖母の助力を、患者にも求めしめ、躬らも求めぬ。聖母允さ給ひ

て、大光を發し、聖女セシリア、聖女カタリナ等を伴ひて、現はれ給ひ、臥床に近きて曰く「余、汝の請ふことあるを、知りて來ぬ。何事か請ふ。告へ」と云へり。患者、敬畏に堪えず、心大に亂れて、請はん事も皆忘れて、何を云ふともなく、躊躇默然たりき。一々、其躊躇するを見て、細に諭へて曰く「愛兄よ、汝に必要の事は、天主の聖母細に知し召し、給へば、一事も自ら請はず、皆聖母に讓任せよ」と云へり。患者其諭に從ひて、聖母に向ひ奉りて曰く「聖母、爾は、何事をも細に知し召し給へば、爾の旨の思はずまにまにし給へ。余、何をも請ひ奉らず」と云せり。聖母、二女の携ふる油を取りて、終油式の時の如く、患者を傳りぬ。聖母の手、患者の軀に觸るゝ、卽ち、病苦は、跡なく失せ、心意は、すがすがしくなりしを、感ぜき。特に奇異なるは、爾來一切邪念の誘惑に遭はざりき」と(1.P.I.1.C.93.)なり。

七　聖會吏を閲れば、四世紀の頃は、聖賢最多かりき。ベンジアミンと

言ふ賢者あり。隱脩士なりけり。天主の特惠を蒙り奉りて或は、按手し或は、傅油し或は、祈禱して、諸病を癒しぬ。不幸にして自ら、水腫疾に罹り、漸く腫張して、八個月の間は、戸外に出入することも、自在に起臥することも、能はざれども、諸病を癒すこと、猶病前と異ならざりき。他を痊せども、自を痊すこと能はざることを、惻隱する者あれば卽ち、慰撫して曰く「吾靈魂の爲、天主の聖寵を請ひ奉りて、身体の事を顧慮すること勿れ。身体壯健なるも、何の益かある」と(Hist.eccl.P.2.L.6.c.2.)云ひしとぞ。

八　隱脩士ありけり。バルナバと云ふ。旅行して木刺を蹴み、腫張して、甚く苦痛を覺えつれども、木刺も脫かず、藥劑も施らずして曰く「斯てこそ天主の爲若干の苦を忍び得め」と云へり。訪者に語て曰く「吾曹は、苦痛、患難を忍びてぞ、外漸く弱めば、內漸く强らん」と云へり。

九　聖者パコミオの傳記に、隱脩士ザケオの事あり。癲癇を病みて、身

体大に疲労せり。然れども、斎戒を遵り、苦業を行ひ、院則に従ひ、祈禱會に臨む等の事は、毫も健者と異ならざりき。口禱、念禱の暇には、帶を織り、籠を編き、業暴くして手に適はず、破裂して鮮血流るれども、毫も厭はざりき。毎夜、聖書を敬讀、默想して眠みぬ。定課の時期來れば、即ち起き、終れば即ち、更に祈禱して、常に夜を明しぬ。一日の事なりけり。他隱の脩士訪ひぬ。ザケオの手裂けて、鮮血淋漓たるを見て、惻隱の心を發して「油を傳れば、苦痛和がん」と曰ひて、傳り得させければ、ザケオの苦痛反て增加す。訪へる脩士、ザケオに代りて、其狀を聖者パコミオに哀訴す。聖者曰く「愛子よ、天主は、吾曹の病苦を見給はず、見給へども、痊し得給はずと、汝は思ふか。痊し給へども、自ら痊ゆるまで、吾曹に忍ばせて、其全能に依らしめ給はん聖慮なり。今、輕小の苦痛を吾曹に忍ばせて、後、重大の恩賞を報ひ給はん聖慮なり。」と云へり。ザケオ、聖者の言を聽きて、心に大に羞ぢて、赧然

として曰く「父よ、余、錯てり。余、精しく天主に依り奉らず、聖旨にも翕合し奉ずして、妄に恢復を願ひて、罪を犯しぬ。父よ、此赦免を賜らんことを、天主に轉求せよ」と云へり。ザケオの犯じゝ罪は、最小なれども、爾來贖はんと欲して、行ひし苦業は、最大なりき。常に痛哭、流涙して、食は、粗雜なる物を二日に一たび喫ひたりき。斯の如くして二個年も經たりき。聖者、ザケオの美行を、諸弟に語げて、誰やし人も、丹誠を凝して天主に依り奉りて、苦を嘗め、難を忍びて、小罪をも、忽にす可からざる旨を、示しゝと云ふ。

第十八章　生にも死にも、天主の聖旨に翕合せざる可からず。

一　死にも生と均しく、天主の聖旨に翕合し奉らざる可からず。概言すれば、死より窘難、恐懼なるはなし。然れども基督教完德を脩めし人は、

既に難路を半過ぎ來て、志す境域遠かざれば、死の恐懼も甚しからざらん。死の、吾曹の決志を妨げ、戰々兢々たる念を懷かしむるは、

第一。死は、久しく思慮を焦し、永く身体を苦しめて、求め得し富貴、官爵光榮、安逸、快樂等を失はせ、恩愛、親慕の父母、親戚、朋友、妻努を奪へばなり。吾曹、基督信者は、富貴、官爵を妄貪せず。父母、親戚、妻努、朋友を愛慕すれども、精しく天主の聖旨に讓任し奉れば、之を失ふことも、最難からず、之を離るゝことも、最苦しからざるなり。肉を去り、齦を弛めて齒を拔かば、容易にして、苦痛も甚しからざれども、否ざれば、最困難にして、苦痛も烈し。預め世物を放棄して、戀慕の念慮なく、心、天上に逍遙する人は、死に臨みて、憂慮と云ふことは、有る可くはあらざれども、世物を放棄する念なく、己むことを得ずして、放棄する者は、大に苦難、恐懼を覺ゆるは、理ならんかし。蓋物斯人を去りて、斯人、物を去らざればなり。

二　第二。良心正しからず、死候の預備もなければなり。小罪と雖も、諄々として、之を避けんと力め、誤て、犯して靈魂を汚さば、直に慚愧、痛悔して、常に清めんと勉むる者は、遠く靈魂の妨害を退けて、良心を傷むることなく、死候の預備足れば、恐懼することなし。

三　既に第二編第五章べ述たる如く、萬事に天主の聖旨に讓任し奉りて「婚筵より歸る主を待つ如く」(L.uc. 12,36.) 死候を待つは、心正しくして、密に天主と親合し奉る證なれども、死候を想て恐るゝは、心も斜にして、天主と親合し奉ることも、疎なる徵なり。死候の預備なき箸なり。羊は屠處に牽れても、平々、安々として、默死すれども、豚は、惡聲を發し、掙々、孔々として、敢て安せず。羊は、義人、有德の人に似て、豚は、不義、有罪の人に似たり。此は、死候を恐るれども、彼は、恐れず。預備足れば、死刑の宣告を受けゝる者は、出さるれば、刑戮せらるゝと知れば、監門開く毎に、死を

思ひて、恐るゝなり。無罪の宣告を受けゝる者は、放免せらるゝと知れば、監門開けば卽ち喜ぶ。罪を犯しゝ基督信者は、良心常に刺撃して、死すれば必ず、永刑に處せられんと知れば、罪を犯しゝ日より、死の漸々近くを感じて、心大に憂苦、攪亂して、常に愁歎、失望すなり。心清淨なる信者は、死候を見れば卽ち「放免の時こそ近け。享福の時こそ來つれ」と云ひて、安靜、歡悅せん。吾曹も、基督教完德を脩むれば、死期に臨みても、容易に天主の聖旨に翕合し奉り得可ければ、其期の來るを待たん。來れば卽ち、喜び迎へて、欣然として「主よ、吾靈魂を携へて、囹圄より出し給へ」と(Psal.141,8.)曰はん。

四　「野獸を恐れざれ」とは。(Job.5,22.)古聖ジョブの云へる言なり。聖者グレゴリオ、立言して曰く「義人の死候に臨みて、安寧なるは、報酬を享け初むればなり」と(L.6.mor.c.16.)云へり。義人は、死候に臨みて、眞福を味ひ初

むれば、心安然として樂めども、不義の人は、處せられん永罰と、良心の刺撃とに因て、預め地獄の永苦を感じて、慄るゝなり。聖者キリマコ曰く「日々、死を俟つは、稱揚す可けれども、聖者ならざれば、俟つこと能はず」と(Cl im. e.6.)云へり。聖者アンボロジオも、死候に備ふる者を稱揚しぬ(Amb. in-orat.fun. de obitu Valentiani. Iup.)。太祖等は、常に死候に備へて、今世を以て旅館とし、自已を以て旅客として、敢て意を今世に留めざりき。使徒ポーロ、此義を、ヘブレア人に示して曰「斯く言ふ者等こそ、故鄕を求むることを表せ」と(Heb.11,14)云へり。ダビド聖王は死候の速に來らんことを、天主に哀願し奉りて曰く「如何なれば、吾流刑は延びけん」と(Psal.119,5.)云へり。太祖等の頃は、天門塞りて通せず、死すとも、直に入ること能はざりけれども、切に世を厭ひて、蚤死を願ひき。今や、天門開きぬ。靈魂清淨なれば、死して障碍なく、直に昇天して、永に天主と樂み奉り得ん。如何か、哀願し奉ら

さるべし。

第十九章　蚤逝を願ふ理由。

一　吾曹は、萬事天主の攝理に讓任し奉れば、生くるにも、死するにも其聖旨に、翕合し奉らざる可からざれども、理由あれば、死を願ふことを、得べし。今、其二三の理由を擧示せん。

其一。後世の快樂、眞福を慕ひ、今世の艱難、辛苦を厭ひて、此を避けて、彼に就かんと欲して、死を願ふは、正理に適ひて罪なし。言へることあり「安死は、苦生に優る」と（Eccl.30,17.）なり。世の患難、辛苦は重くして、且つ多ければ、死して之を避くる放任あり。故に、蚤死を天主に懇請し奉るとも、敢て罪ならず。諸聖の說を按ずれば、天主は吾曹に、現世の戀念を轉じて、後世を

天主に讓任し奉りて、懇願し奉らく「主よ、余、既に久しく生きぬ。今、死するも遺憾なし。若し、主の聖意に協ひ給はゞ、死なして、此患難を脫し給へ」と申し奉るなり。是、敢て罪ならず。

其二。聖會の遇ふ迫害と、世人の天主を背ぎ奉りて、犯す罪惡とを見て、忍ぶこと、能はず、蚤死を天主に請ひ奉るは、又更に正理に適ひて、完全なる願なり。往昔、アカブと云ふ者、ゼザベル等が、祭壇を毀ち、預言者等を殺し、敎會を迫害しき。預言者エリアをも殺さんとて探索しければ、預言者は、單身、之に抗爭すること能はず、曠野に遁げぬ。死に座りて、死を天主に請ひ奉りて曰く「主よ、吾生命を收め給へ、余、今、吾祖より善からず」と（3.Reg.19,4.）云へり。イスラエルの將軍大マカベオは、將士の勇氣を皷舞して曰く「吾曹の戰死は、國家、侵略、掠奪せられ、聖器、穢蔑、汚辱せらるゝに勝るなり」と（1 Mac. 3,56）云へり。ウンダリの暴軍、西班牙を過ぎ、亞弗利加に侵入して

愛慕せしめんと欲し給ひて、許多の患難、辛苦を降し給へり。今世は、漠然として定ならざれども、後世は、確乎として變らず「哀哭、痛苦等と云ふことわるなし」(Apoc. 21,4.)。聖者オグスチノ曰く「天主は、廣大、無限の仁慈を以て、今世を憂苦、困乏の所として、短め給ひ、後世を福樂、歡喜の所として、長め給ひて、以て速に憂患、困乏を去り、以て永に福樂、歡喜を存し給へり」と(Aug.serm.37.de sanctis.)云へり。聖者アンボロシオ曰く「今世は憂苦、患難に滿てり。死を以て之に比ぶれば、死は、懲罰にあらずして、大恩の如し。天主若し、此大恩を吾曹に惠み給はずば、吾曹は、天主に懇ひ奉りて、此大恩を惠み給ひて、速に患難、憂苦を避けしめ給へと請ひ奉らん」と(Amb.serm.sup. c.7.Job.c.2.)云へり。世俗の人は、患難、憂苦を甘じて忍ぶこと能はず、己を怨み、他を尤めて、天主の聖旨に讓任し奉らず、妄に蚤死を天主に請ひ奉りて、罪を犯すなり。丹誠を盡して、天主の聖旨に順ひ奉る者は、然らず、全く

ヒッポ府を圍みぬ。放火、殺戮して、貴賤、老若、男女を分たず、殘害を極め、掠略、亂暴を盡したり。此府の司教、聖者オグスチノ、聖殿は、掠奪、瀆冒せられて、荒廢し、府民は、首長なく散亂して、父子相失ひ、夫婦相離れ、府内寂寞、荒涼として、驚懼に堪へたる慘狀を見て、汪然として泣きて、常に天主に哀訴し奉りけり。一日、祭司等を召集して、哀然として諭して曰く「余、天主に、吾曹を此禍災より救ひ給へ。救ひ給はずば、堪ふる耐力を與へ給へ。與へ給はずば、潔く吾靈魂を收めて、此禍災を見せ給はざれ」と請ひ奉りければ、天主は、第三事を聽れ給へり」と云へり。聖者、久しからずして大病に罹り、圍後三個月にして死しぬ。聖會の艱難に遇ふことゝ、惡人の罪を犯して、天主を背ぎ奉ることを見ることを、得忍ばず、奮然蚤死を請ふは、聖者等の特脩の德なり。

其三。罪を犯さずして、身靈を清淨、潔白に保たんと力ひれとも、能はず、死

せざれば、此憂わり、此憂を遮けんと欲して、蚤死を請ふは、頌揚すべき事にこそ、古人の遠躅、今人の遺跡を閲れば、篤く德を脩め、高く善に進みて、切に天主の聖旨に協ひ奉りて、遙に吾曹の上に超越せし人も、罪を犯さざることを得ず。況や吾曹や、犯罪の傾向を以て生るれば、罪を犯さとしとするも、能はず。故に精誠を盡して、天主に事へ奉る人は、常に戰々兢々として、已を顧み、蚤死して、犯罪の憂を避けんと、欲するなり。吾曹存在せざれば、罪は犯さず。生きて罪を犯さんより、死して犯罪の憂を避けんこと、ころ、願はしけれ。蓋し、罪は、無より惡く、犯罪は死に如かざればなり。吾主基督、暗に負恩者ジュダスを指して、曰く「斯人や、若し生れざりしかば、善かりけんを」と（Matth.26,24.）云へり。會衆經に曰く「余、生者よりは、死者を尙び、生者死者よりは、未生者を幸福なりと、思ひぬ」と（Eccl. 4,2.）云へり。聖者アンボロジオ解釋して曰く「死者の生者より尙ばるゝは、更に罪を犯し

得ざればなり。未生者の生者と、死者とより幸福なるは、未だ罪を犯すことを知らざればなり。然らば、主よ、主は、余罪を犯して、主を背ぎ奉りて、主に遠かり奉らんことを、放任し給はざれ。主よ、主は、預め余罪を犯さんことを知り給はゝ、速く吾靈魂を、收め給へ。主よ、余、主に事へ奉らんと、欲してこそ、生きんと欲し奉れば、生きて、主に事へ奉ること能はずば、死なせ給へ」と、天主に蚤死を請ひ奉るは、適理の請なり」と（Amb.serm.18,sup.ps.118.）云へり。斯て、吾曹は、罪惡を恐懼し、天主を愛慕し奉らん熱愛と、謙孫の實情とを、發し、未だ曾て爲さゝる請願を爲さば、天主の聖意には、篤く協ひ奉り、自已には、大に益せん。聖者ルドビコは、佛蘭西の皇帝なり。母后ブランカ、皇帝を訓戒して、曰へらく「愛子や、余、汝の大罪を犯すを見んよりは、罪なく死するを見んこそ、欲しけれ」と云へり。母后の願望は、最美はしくして、又善く天主の聖意にも、協ひ奉りけん。天主は、親しく皇帝を庇

護し給ひたれば、生涯大罪を犯さゞりしと云ふ。吾曹の願望も、ブランカ后の願望と均しからば、ブランカ后と均しき効果を脩めん。

四　啻大罪をのみ避けんと欲して、蚤死を願はず、小罪をも避けんと欲して願ふは、最美はし。虚言を吐くは小罪なり。此罪を犯して、天主を背ぎ奉らんより、死して、天主の聖意に協ひ奉らんと、欲するは、誠精を盡して、天主に事へ奉る者の期望せざる可からざる事にこそ。言へることあり「義者も日に、七たび跌く」と（Prov.24.16.）なり。屢罪を犯すを謂ふなり。若し一日に、屢罪を犯さば、日月重ならば、罪惡も必ず重ならん。義人にして、屢罪を犯す、況や吾曹や。日月を重ねて、罪惡を重ねずと言ふことなし。丹誠を凝して、天主に事へ奉る人は、小罪は更なり、小失、小乏、魔誘等は、人の常に遇ふ所なれども、皆避けんと欲して、蚤死を懇請すなり。輕世金書に曰く「嗚呼、主よ、如何なれば、余斯く苦しむ。即ち力行せんと、決志すれば徹誘

に遇ひて、其苦に堪へず。嗟乎此生は、如何なる生ぞ。實に薄幸にして患難、憂苦斷えず。陷穽、仇敵四方に滿てり。誘惑の苦、相繼て、去來息まず。交戰未だ休まず。即ち、多敵闘ひて至る。此の如く多苦、多災あり、如何か此生を愛慕せん。此の如く多疫、多死あり、如何か之を生と言はん」と（de imit. Chr. I. 3.c.20.n.1.3.4.）云へり。聖女ありけり。常に曰へらく「若し、生死孰れかを擇ばしめ給はゞ、余、死を擇ばん。死すれば、罪を犯して、天主を背ぎ奉らん憂なければなり」と云へり。小罪をも避け、小失をも除かんと欲して、蚤死を請ふは、大罪を避けんと欲して、請ふに勝れり。蓋し、大罪を犯すことを欲せずして、蚤死を請ふは、永刑に處せられんことを、懼るゝ意ありて、天主を愛し奉る念、薄く、自愛の情、厚し。小罪を犯して、天主を、背ぎ奉らんより、死なんと欲するは、天主を愛し奉る念、厚くして、自愛の情、薄ければなり。其志向は、正潔にして、大成德の有證にぞありける。

五　「余罪惡過失を贖はんと欲すればこそ、久しく生きんと欲すれ、豈徒に生命を貪らんや」と、言ふ人あり。久しく生きて、漸く罪惡を減し、漸く善德を增し得れば、久しく生きんと、欲する理なかる可からざれども、漸く生れば、漸く罪惡を增して、天主の責罰を蒙り奉らんことも、漸く嚴酷なるに至らば、久しく生きんと欲する、豈理ならんや。聖者ベルナルド曰く「吾曹は、愈々久しく生くれば、愈々罪惡を犯し、愈々日數を增せば、愈々罪數を增す。如何妄に、生きんことを欲せんや」と（Bern. o. 2, mod.）云へり。聖者ヒエロニモ曰く「幼年にして死する者と、老年にして死する者との差も、如何とか思ふ。老年にして死する者は、幼年にして死する者よりも、諸の過の罪者となりて、諸の罪を荷へり」と（Hier. Epist. ad Heriod.）云へり。聖者ベルナルドは、善く此理に通じて、謙遜の餘に、常に曰へらく「余、善に進むと、寡ければ、久しく生くることを恥づ。死の備足らざれば、速に死するこ

とを懼る。然れども、天主の仁慈は、限なし。久しく生きて、不正の行を爲し、他人を跌かしめんよりは、或は死し、或は天主の仁慈に讓任し奉らんと、欲す」と（Bern. de inter Dom. C. 35.）云へり。此語は、罪を犯さんことを恐れし餘に、聖者の誦へける語なれども、吾曹にも、正しく適當すれば、常に節へて、犯罪の防禦となさゝる可からず。師父アビラ曰く「最上の準備は爲し得ず、中等の準備を爲し得る人も、生を請はんよりも、死を請ふこそ、適當なれ。犯罪の危は、常に吾曹を圍繞すれば、生くる間は、此危を避け得ざれば、眞に死すれば避け得ればなり。故にこそ、聖者アンボロジオも「死は、不幸の墓、弊、諸德の蘇生なり」と（Amb. de bono mortis C. 4.）曰へれと云へり。

六　既に擧示せる理由は、蚤死を請ふに、善く適當して、善良完全なれども、使徒ポーロの蚤死を請ひし理由卽ち、基督を面に、視奉らんと欲する願望こそ、更に適當にして、更に善良、完全なれ。使徒曰く「余、身体の錬鎔

を脱れて、基督と、親合し、奉らんことを、願ふ」と（Phil.1,23.）云へり。使徒よ、如何なれば、身体の錬鎖を脱れんことを欲せしか。宣教の勞若を厭ひし故乎。使徒よ「余患難の中に矜る」と（Rom.5,3.）云ひしにあらずや。罪を犯すことを恐れし故乎。使徒よ「死も生も、吾曹を、天主の愛より離すこと、能ざる、余確信す」と（Rom.8,38-39.）言ひしにあらずや。然らば何故死を切願ずる。「基督と、親合し奉らんと欲する愛に、病みたればなりけん」（Cant.2,5.）使徒の志向や峻きかな。仰ぐ可し、尊む可し。抑使徒は、天主を愛慕し奉らん懇情、漸く強壯にして、身体漸く衰弱しければ、親愛し奉れる基督に向ひて、長大息しけんかし。其聖顔を面に親奉りて、樂まんと欲する心、切にして、情急なりければ、短時も長時と思ひて、忍ぶこと能はざりけり。

七　前段の事は、聖者ポナベンツラの設けゝる、天主を欽慕し奉る愛の第三級なり。其第二級は、萬有に超ゑて天主を愛慕し奉りて、世物の懇

慕に誘はれず、大罪を犯さずして、天主の聖誡を反がざる是なり。是、万人の本分にして、吾主基督は、此義を示さんと、欲し給ひて、少年に汝、生命に入らんと欲すれば、誡を遵れ」と（Matth.19,17.）曰へり。第二級は、脩士の特に遵まざる可からざる仁慈の級階にして、普天主の聖誡のみなちず、贅普の勸誡をも、斜ならず遵りて、聊も犯さゝる是なり。蓋し、脩士は、常態は更なり、高妙、完全の德をも、脩めて、使徒ポーロの教訓に從ひて「天主の善旨、悅旨、完旨を趣せざる可からざればなり（Rom.12,2.）第三級は、愛慕なり。蓋心、完意を盡して、天主を愛慕し奉りて、天主を措き奉りては、殆ど生くること能はざるに至る、是なり（Rem.ubisup.）此級に至る人は、基督と共に、住まんと欲して、身体の、縲絏の、速に破れんことを、懇願するなり。今世は、處刑配所の如し。此刑を速に終へて、故郷即ち、天國に歸へらんことを、切願すなり。世に在る間は、身体の囹圄に繋がれたれば、出て、面に天主を觀奉

りて、樂しむこと能はざれば、此囹圄の速に破れんことを時々刻々俟ひなり。現世は、苦界なりと善く知れば、此苦界に居ることを厭ひて、速に死なんことを懇望すなり。

八　聖者イギナシオの傳記を閲れば、聖者は、軀体の牢獄を出て、臨時も早く、天主を面に親奉らんと渇望を常に抱きたりけり。候の近ぶくを思ふ毎に、天主を親しく親奉らん時刻こそ、遠からざりけれと、理ひて、雪に喜悦の涙を流しゝと、(Iu ejus vita L.5, C.2.)あり。其死候の近さを思ひて、喜悦の涙を流しゝは、天主の尊前に至り奉りて、眞福を獲て、樂まん願欲する切情に出でたれども、特更に、懇愛し奉れる天主聖子の人性に、受賜給ふ無上の光榮を、熟視し奉らんと、欲する誠意の熾なるに出でたるなりけり。若し吾曹は、朋友を誠愛すれば、其高位に進み、高爵を受けて、榮榮ならんには、必ず其を見んと懇望するならん、聖者も主基督を精誠愛慕し

奉りて、自己を純然忘れれば、其無上の光榮を受け給ひて、永遠無窮に樂しみ給ふを、親しく親奉りて、慶祝し奉らんと、懇望したるなりけり。此愛は、完全無缺にして高妙なれども、聖者は容易に發したりけり。吾曹も、孜々と勉めて怠らざれば、發し得ずと云ふことなけん。

九　既に述べたる如く、死の實狀を細に推究すれば、死は滿悅歡喜とはなれども、悲哀憂苦とはならざるなり。更に進みて久しからずして、天國に行かん。天國に行かば、必ず未だ眼に見ず、未だ耳に聽かず、未だ人智の究めざる永遠無盡の福樂を享け奉らんと、少しく考ふれば、滿悅歡喜、必ず歡樂滿悅とならん。流刑の期滿ち、艱苦の役、終るを見て誰か躍躍せざらん。遠く可き終局の目的あれども、未だ達き得ずして、悲哀に堪へさらんに、達かん日忽ち近かば、誰か歡喜せざらん。廣大尊高なる天財を嗣ぐ可くして、未だ嗣き得ず、憂慮せり。忽ち嗣ぐことを得ば、誰か滿悅せ

ざらん。吾曹は、天國の讓を享く可くして、未だ享け得ず、憂慮せるを、死は忽ち享けしむ。言へることあり「主よ、主の愛士に安服を賜はん時、嗣承わらん」と(Psal.126,2)なり。又言へり「義人は、死期、主を望む」と(Prov.14,32.)なり。死は、昇天の梯子、流刑の安慰なりけり。聖詩に曰く「主よ、余、敬詠して、清淨の途を行かん。主は、何時か余に臨み給はん」と(Psal.100,2.)云へり。聖者ダビデ、此詩に依て、天主に哀訴し奉りて曰く「主よ、余、吾生命を、潔く保おんことを、專ら願望して、常に主に讃詠し奉ちん。吾流刑は、何時か終らん。主よ、主は、何日か余を呼び給はん「余、何日か、主の尊前に現はれ奉らん(Ps.41,3.)。嗚呼、吾懇望の時期は、甚しく遲滯せる哉。余、此時期の近きぬと聽かば、ダビト聖王の「吾曹は、聖王の玉室に進み奉らん。ゼルザレムよ、善曹の足は、直に爾の門に立たんと、余に言へる言を、聞きて、欣喜しぬ」と(Psal.121 iet 2)曰へる如く、乃て天國に到り、天使、聖者、聖女等と、均しく、主の尊

前に出で奉りて、永に主を讃美し奉らんと、思ひて、如何か、歡喜せざらん」と(Tract.9.sup.ep.L.Joan.)云へり。

第二十章　古人の遺表を擧げて、前章の事實を證す。

一　アレキサンデレアの大司教、聖者ジョアンの傳記を聞れば、某縉士の事あり。縉士、子を有てり。一子なり。親愛淺からず、生命の長からざることもやと、思ひて、一日、自子に長命を、賞賜し給はんことを、天主に代禱し奉れ。此を目的として、究人を哀矜せよ」と請ひて、巨額の銀圓を司教に獻げゝり。司教、請の如くす。一個月を經へて、其子病死す。縉士の悲哀、傷心言ふばかりなし。且謂へらく「司教の祈禱も、哀矜も利益あらじりき」と云へり。司教、傳聞して、其不運を憫みけん、仁慈を垂れて、安慰し給はんことを、

天主に懇請し奉れり。一夜、天使現はれて、緒士に告げて、曰く「天主は司教の爲し、祈禱、哀矜を聽れ給ひててう、汝の愛子を賞賜し給ひて、永遠無究の天福を、獲せしめ給ひけれ、其子、死なずば、必ず大罪を犯して、天福を獲奉ること、能はざりけん」と云へり。又曰く「天主の斷定し給はずば、一物も得偶成せずと、知らざる可からず。縱ひ、天主の斷定し給ふ原因は、究め難しと雖も、敢て憂慮せず、從ふ可きは、卽ち從ひ、忍ぶ可きは、卽ち忍ばずば、ある可からず」と云へり。緒士、此言を聽きて、心大に安定し、稀有の熱心を發して、天主に事へ奉りきと云ふ。

二　聖者モリシオは、テバイ聖軍の將帥にして、嘗て、全軍を擧げて、天主の爲に、命を致し、人なりき。貴婦人の、篤く聖者を尊敬するありけり。一子を有てり。德育怠らざりけり。抑も、聖者ベヂクトの比は、ローマの貴人等は、俯院にて、敎育せられけり。聖者モウロ、聖者プラシオ、聖者トヤス等も皆、カスサン山の俯院にて、敎育せられぬ。此子も、聖者モリシオの俯院に入りぬ。天性聰明にして、勤勉深く、剩へ、善俯士等の敎訓を受けて、學術のみならず、敬神、俯身等の道にも、大に進みて、俯士等と、聖歌を詠ふ聖務を行ふまでに至れり。母の歡喜、樂言ふ可くもあらざりけり。一旦大病に侵されて、忽ち死しぬ。母の悲哀、悲傷譬ふ可くもあらず、涕哭の斷ゆる時なかりき。俯士等の、聖歌を詠ふを聽きて「嗚呼、以後、吾子の聲は、聽き得じ」と、思ひぬる時、悲哀特に甚しく、堪へ得可くもあらざりき。其情胸に滿ち、憂慮心に溢れて、日夜を過しけり。痛哭の餘困疲して、一夜、熟眠しけり。聖者モリシオ現はれて、懇に問ひて曰く「日夜涙に沈みて、吾子の死逝を悲哀するは、何故なればか」。貴婦人云ふ「吾餘命、如何にならんも、余を安慰して、悲哀を止むる者なければなり。余、死して、子に地下に隨はざれば、涙の涸く時あらじ」と曰ふ。聖者曰く「悲哀、涕哭すること勿れ。汝の子は

死せず。天堂に在て、吾曹の一隊と、永遠無究の眞福を享けて、樂しめり。吾言の眞僞を、究めんと欲すれば、朝課の時刻、聖殿に詣でよ。其脩士等と、聖歌を詠ふを、見聞せん。霄明朝のみならず、聖務行はるゝ時は常に、必ず見聞せん。今、哀哭の秋にあらず、慶賀の春なり」と云へり。婦人、醒めぬ、夢の眞否を確めんと、勤めて朝課の時刻を俟ち、急忙聖殿に登る。纔に聖殿の門に進めば、卽ち、交誦の初句を、子の誦詠するを聞きぬ。確、其眞福を享けて、樂しむことを知りぬ。心大に安じて、常に天主に大謝し奉りて、死に至りぬ」と（Hist. Theb. L. 2, C. 2.）云ふ。

三　貴人ありけり。一日、田獵す。從者皆、獸を逐ひて散りぬ。貴人も遁みて、深林に入り、更に進みて、覺えず荒野に出づ。何處ともなく、詠歌の聲す。「人跡絶えたる此荒野に、此詠歌は」と、大に異しみて、從者の聲かと、傾耳すれば、あらず。土人の聲かと、熟聞すれば、あらず。愈々傾耳すれば、其音和みたり。愈々熟聞すれば、其調雅たり。愈々大に異みて、確認せんと、探求すれば、癩者あり。全身腐爛して、肉塊諸處に溢れ、膿垂り、血流る。貴人、一見して、忽ち慈愍す。氣胆を平げ、心力を厲まし、近きて、嚮に詠へるは、汝か、如何にして、彼美聲は出ずと問へば、「余にて有りけり。自然の聲なり」と答ふ。貴人曰ふ、「汝の狀態は、實に憫然なり。此狀態を以て、彼妙音を出し、喜々、歡々として、詠ひて樂しむは、何故か」。癩者曰ふ、「余、天主を視奉ること能はざるは、此身体の障屏ありて、隔離すればなり。此障屏速く除りて、面に天主を視奉りて、樂まんと、日々待てば、障屏、日々朽壞して、落るを見て、欣喜の餘詠ふなり。障屏の爛除し盡れば、靈魂は、天主の尊前に登りて、樂しみ奉らん。天主は、眞福の源にて在して、永遠盡き給はず。樂しき哉、喜しき哉」と（Elor. de Henriq. grand. L. 4. C. 68.）云へりとぞ。

四　聖者シピリアノ曰く「某司教病みぬ。危篤に成りて、長命を賜へ給へ

はんことを、天主にれ懇請し奉れり。一日のことなりけり。壯年異光赫耀として現はれ、威儀儼然として、司教に問ひて曰く「司教よ、病苦を慨るゝか。世を去ることを欲せざるか。余に、何をか爲ごしめんと欲す」と云ひて、死することを欲せざる者の天主の聖意に協ひ奉らざる旨を、示しゝ」と云へり。聖者又曰く「斯て、天使は、司教をして斯義を他にも、教示せしめたり」と（Cyprian. L. de mortalit.）云へり。彼小壯なる士は、天使なりけり。

五　シメオン、タラスと云ふ者、記錄せることあり。「修院長聖者テオドチオ、常に死候を默想しぬ。此默想の、基督信者に益することを、認めて、信者にも、行はしめぬ。一日、弟子等に、進善の方法を示さんと欲して、墳坑を穿たしめけり。其周圍に、修士等を集めて曰く、「此墳坑よ、誰か、衆に先て、殯葬の式を受けん」と云ふ。修士にして司祭あり。バジリオと言ふ。最壯健なり。有德にして、常に死候に備へたり。恭しく進み出て跪きぬ。時ひて曰く「汝よ、請ふ、福を降し給へ。余こそ、修友に先て、殯葬の式を受けめ」と云へり。院長諸ひて、自ら、祈禱し、弟子等にも爲しめて、聖會の殯葬式を行ひぬ。一日、三日、九日、四十日の式終りぬれば、バジリオ、熱疾もなく、頭痛もなく、眠るが如くして、世を去りて、修德の報賞として、主基督の御前に至り、福樂を享け奉りぬ」となり。

六　聖者オグスチノ會史を閲れば、「修院長聖者コロンバアノの姪、修士小ヨロンバノの事あり。修士熱病に侵されて、最危篤に見えたり。修士、常に、天主の仁慈を懇恃し奉りて、死逝を切願しき。一日、異光赫々なる壯年現はれて、懇告して、曰く「汝知らずや、汝の叔父、汝に長命を得せしめ給はんことを、天主に哭求し奉りて、汝の去世を支障す」と云へり。修士、心大に憂苦し、悲哀滿面に溢る。然れども溫和、敦厚に、院長に哀訴して、曰く「如何余を、患難の世に留めんことを力めて、永遠、究の福域に入ることを、

支障す」と云へり。此一言、痛く院長の心を感動しぬ。院長即ち、姪の死逝を惜しむ祈禱を止めたり。脩士、終油、聖体等の秘蹟を授かり奉りて、脩友に愛撫せられ、平々、安々として、逝きぬとぞ（Chron. ordin. S. Aug. Centur. I.）。

七　タラシアは、ゲレシア北部の古國なり。聖者アンボロジオの說に據れば、國風として、人生るれば、弔哭して以て、困苦充滿の世に入り、患難を忍ぶことを、知らしめ、死すれば、慶賀して、患難、憂愁の世を去りて、安樂の途に就くことを、知らしめたりき。タラシア人等は、未だ文明の風を被けず、異端に沈みたれば、天堂の眞福あることを認めて、之を受くることを、知らずと雖も、死することを慶ひて、生るゝことを弔ひたりき。吾曹は、信の光を蒙れり。聖寵を有ちて死すれば、眞福を受け奉らんことを、知れり。如何死を視て、慶賀の情を發さゞらん。言へることあり、「死日は、生日よりも好し」と（Eccl. 7, 2.）なり。故に救主基督世を去り給はん時、弟子等の悲哀の色あるを見給ひて「曰く爾曹若し、我を愛すれば、我聖父、許往くことを、喜ぶ可きなり」と（Joan. 14, 28.）云へり。ラザロを復活せしめんと、決定し給へる時、泣涕し給へるも、患難、困乏の世に再生せしめて、流刑の酷苦を背しめんと、思ひ給ひて、惻隱の心に、堪へ給はずしてなりけんかし。

第廿一章　公難にも、天主の聖旨に翕合し奉らざる可からず。

一　天主の聖旨に翕合し奉るは、啻、一身一家の私難にのみならず、飢饉、大亂、疫病其他、天主の降し給ふ公難にも、翕合し奉らざる可からず。正直、公義の判事、朋友の罪案を審して、死刑を宣告すれば、惻隱の心と、友愛の情とは、內に戰ひて宣告を拒み、正義は、外に公義を計りて、宣告を促すなり。天主、義怒を發し給ひて、某國民を懲罰し給ふことの、嚴酷なるを見

支障す」と云へり。此一言、痛く院長の心を感動しぬ。院長卽ち、姪の死逝を惜しむ祈禱を、止めたり。脩士、終油聖体等の秘蹟を、授かり奉りて、脩友に愛撫せられ、平々安々として、逝きぬとぞ（Chron. ordin. S. Aug. Centur. I.）。

七　タラシアは、グレシア北部の古國なり。聖者アンボロジオの說に據れば、國風として、人生るれば、弔哭して以て、困苦充滿の世に入り、患難を忍ぶことを、知らしめ、死すれば、慶賀して、患難、憂愁の世を去りて、安樂の途に就くことを、知らしめたりき。タラシア人等は、未だ文明の風を被けず、異端に沈みたれば、天堂の眞福あることを認めて、之を受くることを、知らずと雖も、死することを慶ひて、生るゝことを弔ひたりき。吾曹は、信の光を蒙れり。聖寵を有ちて死すれば、眞福を受け奉らんことを、知れり。如何死を視て、慶賀の情を發さゞらん。言へることあり、死日は、生日よりも好し」と（Eccl. 7, 2.）なり。故に救主基督世を去り給はん時、弟子等の悲哀の色あるを見給ひて、曰く「爾曹若し、我を愛ずれば、我聖父、許往くことを、喜ぶ可きなり」と（Joan. 14, 28.）云へり。ラザロを復活せしめんと、決定し給へる時、泣涕し給へるも、患難、困乏の世に再生せしめて、流刑の酷苦を、脅しめんと、思ひ給ひて、惻隱の心に、堪へ給はずしてなりけんかし。

第廿一章　公難にも、天主の聖旨に翕合し奉らざる可からず。

一　天主の聖旨に翕合し奉るは、啻、一身、一家の私難にのみならず、飢饉、大亂、疫病其他、天主の降し給ふ公難にも、翕合し奉らざる可からず。正直、公義の判事、朋友の罪案を審して、死刑を宣告すれば、惻隱の心と、友愛の情とは、內に戰ひて宣告を拒み、正義は、外に公義を計りて、宣告を促すなり。天主義怒を發し給ひて、某國民を懲罰し給ふことの、嚴酷なるを見

れば、惻隱の心動きて、堪へ難しと雖も、天主、其民の公益を計り、己の光榮を大にせんと、思し召し給ひて、降し給へると、推思し奉れば、吾曹は、聖旨に翕合し奉り得んこと、容易ならん。蓋し、天主は、吾曹の、萬事聖旨に翕合し奉らんことを、欲し給へども、是を積極的に愛慕することを、要め給はず、唯、耐忍を以て凌ぎ、攝理に安じて、毫も怨意を懷かず、怨語を吐かず、專ら聖旨に翕合し奉ることを、要め給へばなり（Bonav. 1. Sent. dist. 48.）。事、事に耐忍を以て凌ぐことは高妙の業なれども、天主の聖旨、公義、光榮の有る所を、探究して、之に從ひて事を爲ふは、更に高妙、更に有功の業なり。斯の如くしてこそ、今、天上に列座する聖者、聖女等も、天主の聖旨には、翕合し奉りしなりけれ（S. Thom. 2. 2. 9, 15. art. 10 ad 1.）。聖者アンゼルモ曰く「天上にて、吾曹の旨の、天主の聖旨と翕合し奉ること、兩眼の互に翕合するが如し。右眼一物を見て、左眼見ざること能はず。兩眼一物を見れども、

物は、依然として、聊も異ならず」と（Ansel. L. similit. C. 5.）云へり。吾曹も、聖者、聖女等を倣ひて、天主の聖旨の、天に行はれ給ふ如く、地にも、行はれ給はんことを、懇望し奉れば、吾曹の完德、漸く增長せん。天主の欲し給ふことを、其有ち給ふ目的と、其用ゐ給ふ方法とに從ひて、欲し奉るは、實に頌揚す可き事にこそ。

二　賢哲ポスシドニオ曰く「ワンダリ軍、亞弗利加全州を暴略し、ヒッポ府を圍みて、良民を安殺し、貨財を掠奪して、慘狀を極めたり。ヒッポ府の司教、聖者オグスチノ、此境遇に在れども、泰然として、古語の所謂「木石落ち、人死するを觀て、驚動する者は、大人にあらず」とあるを推考して、安慰せり」と（Refert. de S. Aug. Possid. in ejus vita）云へり。吾曹も若し、災難は如何に、大なりとも、皆天主より來なり、天主の聖旨の爲し給ふなり。其源因は、究む可からざれども、必ず正しと、推考すれば、自ら安慰こそ得め「天主の聖

慮は、幽玄なり」と(Psal. 35, 7.)聖詩に見えたり。魯鈍、浅劣なる智を以て、幽玄なる聖慮を探るは、冒險の甚しき業なり。言へることあり「誰か、天主の聖慮を知り奉りし、誰か、天主の顧問となりし」と(Rom. 11, 34.)なり。豈謙遜を極め、誠意を盡して、天主の聖慮を、敬畏し奉らざる可けんや。天主は、全智を以て、吾曹を攝理り給へば、吾曹を利益する物にあらずば、一にても、妄に降し給はずと、信じ奉らずしてある可きや。天主の美善は、限なし。仁慈も、限なし。美善限なく、仁慈限なく在せば、吾曹を災難に遇はせ給ひて、益し給ふとも、害し給はずと、信せずして可からんや。災難、憂苦は、昇天の梯たり。之を攀りて、吾曹を天堂に入らしめ給はん天主の聖慮なり。此梯に因らずして、天國に入りける者は、最寡し。却て、永刑に處せらる可き人にして、此梯梯に因て、永遠、無究の福樂を享けし者は、最多し。災難、憂苦に遇ひて、誠心を醒して、天主に歸依し奉り、犯し〻罪を、切に痛悔して死しける者も、少からず。斯れば、天主の降し給へる災難懲罰は、眞の災難、懲罰にはあらず。却て格外の聖寵、非凡の仁慈なり。

三　往昔、アンチオクス王、ジュデア國民を、苦虐しぬ。老若、貴賤の別なく殺戮し、聖殿の聖器を汚して、亂暴、殘忍を極めたり。之を記錄せし聖經に曰く「冀くば、此書を讀まん者、此災難の酷きを見て、寒膽すること勿れ、此災難は、吾曹の絶激の爲ならず、懲戒の爲なりけり」と(2 Mac. 6, 12.)云へり。聖者ゲレゴリオ曰く「蛭は、一滴も殘さずと、力めて敗血を吸へばころ、醫士用ゐれ。吾曹に災難、憂苦を降し給ふ天主の聖旨は、醫士の蛭を用ゐるが如し。醫士の旨を悟らず、蛭の敗血を吸ふことを、忍ぶこと能はずして、蛭を忌む患者は、思慮淺くして、自益を知らざる者なり。吾曹も若し、或は人、或は物によりて來る災難、憂苦に遇ひて、無比の名醫にて在す天主の、吾曹の罪惡の敗衆を清めて、健勝とならしめんと、欲し給ふ聖旨を悟り

奉らず、其災難、憂苦を忌まば、患者の蛭を忌むと異ならず。天主の吾曹に降し給ふ災難、憂苦は、天主の特恵なり。吾曹に益ありとも、害なし。蓋し、天主は、吾曹を子として親愛し給ひて、災難、憂苦を吾曹に降し、吾曹を懲戒し給ひて、吾曹の罪汚を清め、聊も懲罰を、遺し給はざればなり。

四　セナの聖女カタリナの傳記を閲れば、妄説を以て、己の貞名を毀つ者ありと、聖女聞きて、悲哀に堪へざりき。基督、右毛に花冠を持ち、左手に茨冠を持ちて、現はれ給ひて曰はく「此冠は、時勢に應じて、必ず戴らざる可からず。今、花冠を戴らば、後必ず茨冠を戴らん。選べ」と云へり。聖女曰く「主よ、余私旨を棄て、主の聖旨に從ひ奉りぬ。冠を選びて戴るは、余爲す可き事にあらず。然れども、強ひて選ばしめ給はゞ、茨冠を撰びて戴りて、主を傚ひ奉らん」と云ひて、茨冠を取りぬ。手ら戴りて、力の限り、緊く押込みければ、死に至るまで、常に頭痛を覺えたりと云ふ。

第二十二章　犯しし罪を認めて、篤く痛悔するは、天主の降し給ふ公私の災難を、善く忍ぶ手段なり。

一　師父等の説に據れば、天主は、常に人民の罪惡を罰せんと、欲し給ひて、災難、疫病、兵亂等を起し給ふ。往昔、アザリア、火燎に在て、天主に哀訴し奉りて曰く「主よ、吾曹は、罪を犯したればこそ、主は此災禍を降し給へれ。吾曹は、實に、罪を犯し、惡を作しぬ。吾曹は、主の聖誡を聽かず、遵らざりき。斯ればこそ、主は、公義に據て、此禍災を降し給へれ」と（Daniel. 3. 28, et seq.）云ひき。ジュデア人民、罪を犯して、天主を背き奉れば、天主は、常に義怒を發して、強敵に交附し給ひて以て、苦しめ給ひき。痛悔して、精誠以て天主に歸依し奉れば、義怒を和げて、濟ひ給ひ、アンモニタの將軍、アキオル、

嘗て、ホロフエル子に語て曰く「天主は、常にイスラエル人民を、庇護し給へり。罪を犯して、天主を遠り奉れば、嚴しく懲戒し給ふ。此民を攻めんと欲すれば、預め罪を犯して、天主を背き奉りしと、有りや無しやを、究めざる可からず。罪を犯して、天主の庇護なければ、勝たん。不らざれば、勝ち得可からず」と（Judith. 5, 9.）云へり。三十八年の間、癱瘓を病みける者あり。耶蘇基督之を痊し給ひて曰く「汝、痊されたり、復罪を犯さゞれ。犯さば、更に惡しき事あらん」と（Joan. 5. 12.）云へり。師父等、は此金言を以て、此章の義を證せり。師父等の說に據れば、災難、禍殃は、私となく、公となく、皆、欣然として、忍びて、天主の聖旨に翕合し奉らん助力を、受けんと欲すれば、已に歸りて、犯しゝ罪を着々認めて、天主の降し給へる懲戒の、至當なることを、沈思するに如ず。斯く、犯しゝ罪の懲罰として、受くる禍殃は、最輕くして、罪の重に應せざることを、認めば、忍び易からん。

三　聖者ベルナルド曰く「犯しゝ罪を、正しく內に感ゆれば、外に感ゆる災難は、最輕くして、無が如し」と（Ber. ser. de altit. et haeit. Cord.）云へり。アブサロン、反逆して父王、ダビドを攻めぬ。ダビド遁げぬ。臣下、罵詈、辱恥す。ダビド、其子の反逆するを見れども、臣下の罵詈するを聞けども、甘受、忍耐の玄味の餘、覺ゆずして曰く「余生みし子にして、余を害せんとす。況や、ゼミニの子や」と（2 Reg. 16, 11.）云へり。古聖ジョブ曰く「汝若し、犯しゝ罪の重を誠に認むれば、受くる懲罰の苦は、最輕しと、覺ゆん」と（Job. 11, 6.）云へり。聖者グレゴリオ、解釋して曰く「若し人、負傷して、其傷痕、腐敗して、愈々大く、愈々危くならば、愈々激烈なる治療を施さるゝとも、善く忍ぶなり。吾曹も、罪を犯して、靈魂に負傷せしめしことを、眞に認むれば、天主の、其傷を痊さんと欲して、施し給ふ治療即ち、制慾の苦、屈辱の勞等を、善く忍ばん」と（Greg. L. 10, moral. in Job.）云へり。斯れば、吾曹の、勇みて災難を忍ば

ず、甘じて憂痛に堪へざるは、犯し丶罪の、吾曹の靈魂に負はしめし重傷を、正しく認めざればなり。

三　精を極め、誠を盡して、天主に事へ奉る人は、管、甘じて憂苦を嘗め、喜びて、懲罰を凌ぐのみならず、天主に嚮ひ奉りて、凌がんことを、篤く願ひ、嘗めんことを、切に請ひ奉るなり。古聖ジョブ曰く「誰か請ふ所を、余に得せしめん。始めける者よ、請ふ、余を敗り給へ。其手を釋、さて、余を絶ち給へ。悲哀を以て、余を苦しめ給ひて、寛恕し給はざるぞ、吾安慰なる」と（Job. 6, 8.）云へり。ダビド聖王曰く「主よ、主は、余を、煉ひ、余を、誡し給へ」（Psal. 28, 2.）「余、懲戒を受け奉らん準備を、爲しぬ」（Psal. 37, 18.）「余を屈辱し給はゞ、余、益を得奉らん」と（Psal. 11, 18.）云へり。聖者グレゴリオ曰く「誠に天主に事へ奉る者は、己を懲罰し、屈辱し給はんことを、切に天主に請ひ奉るなり」と（L. 7. mor. c. 7 et. 8.）云へり。實に、此聖者等は、犯し丶罪を考へて、其

重を認め、以て、今懲罰せられずば、後必ず嚴懲せられんことを、善く知りて、深く懼れしなり。故にてろジョブは「悲哀を以て、余を苦しめ給ひて、寛恕し給はざるぞ、吾安慰なる」と曰へれ。其意に謂へらく「某を、後、嚴罰せんと欲して、今、寛恕し給へる如く、今暫く、余を寛恕し給ひて、後永に、嚴罰し給はざれ。慈愛深き父の、其子を懲すが如く、今、輕懲して、後、重懲し給はざれ。余、懲戒を怨まじ」主の聖諭を爭はじ（Job. 9, 10）災難を安慰とせん」と云へるなりけんかし。故にてろ、聖者オグスチノも「主よ、主は、余を燒き、余を切り給へ。今暫く、寛恕し給はず、後永に、寛恕し給へと云」へりけめ。

四　吾曹の、罪を犯して、靈魂に負はしむる傷は、災難を凌ぎて、身体に負はしむる傷より、大なり。然れども吾曹は、常に身体の傷を、痛く感じて、靈魂の傷を感じず。實に愚なる哉。吾曹若し、犯し丶罪の、極めて重きことを、眞に認むれば、罪の爲に受くる懲罰を、最輕しと知りて、ジョブと心を

同じくし言を均くして必ず曰はん「余罪を犯しぬ。余過ちぬ。然れども未だ相應の罰を受けず」と(Job. 35, 27)云はん。眞なる哉、ジョブの言や。吾曹は、深く心に銘じて、屬々口に誦へざる可からず。蓋し、吾曹の凌ぐ、今世の災難は、大なりと雖も、犯しゝ一罪の罰として、凌がん後世の苦患に比ぶれば、眞に微にして、無が如し。故にジョブは「爾曹の受くる懲罰は輕くして、爾曹の惡に應はずと、知れ」と曰へり。吾曹若し、罪を犯して、天主を背ぎ奉りけることを省みて、永遠、不滅の苦刑に處せらるべき者なりと、認むれば、天主の尊嚴を犯し奉りて獲たる罪を贖はんと、切に力めて、如何なる恥辱をも、無禮をも、必ず甘じて忍ばん。嘗セメイと云ふ者、ダビド聖王を罵詈しぬ。從者、セメイを捕へて、重刑に處せんとす。聖王、速しく戒めて曰く「措けよ。主若し、吾患難を顧み給はゝ、此罵詈の爲に、善を報賞し給はん」と(2 Reg. 16. 12.)云へり。其意に謂らく「主は、此罵詈を以て、余に、懷き給へる憤怒を、和げ給はん。是を以て、吾贖罪となし給ひて、余を憐み給はん。此凌辱を得こそ、吾幸福なれ」となり。吾曹も、ダビド聖王の心を以て、恥辱に當り、禍災を忍はゝ、天主は、犯しゝ罪を、贖はしめんと欲して、恥辱も、禍災も降し給へりと、知て、其聖旨を體し奉りて、愛、恥辱、禍災を凌ぐのみならず、更に忍ばんと、願望すれば、逆事も順事とところ、成らめ。若し吾曹の、禍災に遇ひて、怨望し、悲歎して、發しゝ時刻を、痛悔し、改心して、我さば、篤く、天主の聖意に協ひ奉りて、煩勞の感覺、輕くならん。

五　聖者等は、天主の降し給ふ災難を以て、常に、痛悔の具、贖罪の機となすなり。聖會の、患難に遇ふを見れば、即ち、已に歸り、犯しゝ罪を糾察して、謂らく、吾曹自ら、此患難を招きぬ。兵亂起れば、即ち、謂らく、吾罪起しぬ。疫病、荒早等の災難起れば、即ち、又謂らく、吾罪の故なり。是猶輕くして、吾罪の重に應せずと、云ひて、痛悔、補贖して、天主の義怒を、和げ奉るなり。天

主は、一人の罪の故に、若くば一方、若くば一國の人民を、懲罰し給へることあり。往昔、ダビド聖王、罪を犯しぬ。天主、義怒を發し給ひて、猛烈猖獗の疫病を發して、三日にして、七萬の人を消亡し給へり(2 Reg. 14, 15.)。或人曰く「ダビドは、王なり。一國の君長なり。國民は、從屬なり。君長の罪の爲に、從屬懲罰せるゝは、至當なり」と云へり。さは云へ。アカンは、一個平常の人なり。ゼリコ攻擊に、アカン掠奪しゝ罪の故に、天主、國民を懲罰し給へば、全軍敢北して、三千の勇士辛くして、身を以て歸れり(Jos. 7. 4, 5 et 10.)斯、れば、賣首長の罪のみならず、一個平常の人の、罪の故にも、天主は、衆民を懲罰し給ふなり(Exod. 20, 5. et c. 35, 7.)聖經に「天主は、祖先の罪の故に、子孫を若くば三代、若くば四代罰し給ふ」と(Exod. 34, 7.)あるを思へと、師父等は曰へり。然れども、各人、各罪を犯して、相連累せざれば、父の罪、子に及ばず、子の罪、父に及ばず。故に聖意は罪を犯す者こそ、死ぬれ。子は、父の罪を被ら

じ、父は子の惡を被らじ」と(Eccl. 18, 20)曰へり。懲罰は、然らず。父子相連累すなり。天主は、甲の罪の故に、乙を懲罰し、一個人の罪の故に、全教會を懲罰し給ふことあり。

六　天主の聖旨は、前段掲示せる如くなれば、吾曹は、已の罪惡を考視して、天主の聖旨を觀察し奉れば、縱ひ患難は、煩はしくして、心鬱悶すと雖も、容易に忍びて、聖旨に翕合し奉ること、難からず。言へることあり「主に在せば、善と認め給ふことを、爲し給ふ」(1 Reg. 3, 18.)聖旨の、天に成り給ふ如く、地にも成り給へ」(Matth 6. 10)「主よ、主は、是行ひ給ひたれば、余は、緘默して、敢て、口を啓かざりき」と(Psal. 38, 10)なり。吾曹若し、已に歸りて「天主親ら、是を欲し、是を爲し、是を命じ、是を降し給へば、耐忍を以て、甘受せざる可からず」と謂はゞ難中自安慰を感ぜん「吾愛士は、一角獸の兒に似たり」と(Psal. 28, 6.)聖詩に見えたり。師父等解釋して曰く「天主は、親を、一角

獸に比べ給ふ。牧牛は眼の上に角ありて、物に觸れば物を得見ず、一角獸は眼の下に角ありて、物に觸れても、善く物を見る、加之、一角獸は、角を以て物を傷け、又角を以て痊やす」と云へり。

七　吾曹若し、親しく天主の聖旨に翕合し奉りて、其降し給へる懲罰に、恭順し奉れば、篤く天主の聖意に協ひ奉るなり。天主、此翕合と恭順とを、視給はゞ、吾曹を懲罰せんと欲して、發し給へる義怒を和げ、懲罰を停止し給はん。聖會史を閲れば、ヌンニ王アッチラ、大軍を率て、歐州を侵略し、良民を殺傷し、財貨を掠奪されども、敢て抗敵する者あらざりければ、自ら「余は、世の恐怖、天主の懲鞭なり」と（Nauclerus. 2. Nol.）稱せり、佛蘭西國、カンパニア縣、テレカ府に近きぬ。府の司教、聖者ルーポ、玉冠を戴り、司祭等を伴ひて、アッチラと會ひて、問ふ「汝、誰なれば、天下を混亂して、荒蕪たらしむ」。アッチラ答ふ「天主の懲鞭なればなり。司教。アッチラの言を聞き

て曰く「汝天主の懲鞭なるか、善くも來ける哉」と云ひて、城門を開かしめぬ。アッチラ、兵と城門を入れば皆、視官を失ひて、物を見得ず、虚しく過ぎけりと云ふ。實にアッチラは、天主の懲鞭なりけり。天主の懲鞭として、忍受して、天主の聖旨に恭順し奉る者を、天主は、懲鞭し給はず。

第二十三章　祈禱、默想して、心の乾燥する時にも、聖異に翕合せざる可からず。乾燥とは、抑も又何ぞ

一　啻、身外の事、自然、常性の物にのみ、天主の聖旨に翕合し奉らず、神靈、起性の事物にも、天主の賜へる安慰にも、念禱の靈味にも、良心安平して、靜穩なるにも、翕合し奉らざる可からず。人あり、曰く「是等の事にも、私意も亂動せず、私愛も跋扈せざれば、之を制節する必要なし。制節する必

要なければ如何天主の聖旨に翕合し奉らん」と云ふ。豈必要なしと、曰はんや。私意と私愛とは、危險、微纖にして、巧しく聖き物に滲入す、天主の賜へる安慰と、念禱の靈味とは、善く、靈魂に、神力を獲せしめ、世物を厭惡、嫌忌せしめて、自在に、天主に事へ奉らしむ。言へることあり「主よ、主は、吾心を廣め給ひたれば、余は、主の聖誡の途を、趨り奉りたりと」(Psal. 118, 32)なり。吾曹の心ば、愛ふれば、縮小し、悅べば、擴張す。故に「吾心、靈慰の歡樂を得て、擴張しければ、善德の途、聖誡の途を、疾く趨りたり」と、ダビド聖王は、曰へるなりけり。又靈慰ば、吾曹に、私意を去らせ、私情、肉慾を制せしめて、愛苦を凌がしむ。斯れば、天主、吾曹を苦難に遇はしめ給はんと、欲し給へば、常に、預め、歡樂、安慰を降して、靈魂を、強め、進善に備へしめ給ふなり。主、耶蘇、基督は、其十字架の酷刑を、弟子等の見るとも、敢て異しみ奉らざらんことを、欲し給ひて、光榮の聖客に、親ら變じ給ひて、弟子等を慰め給へり。

世を棄て、專ら天主に事へ奉れる人の、事跡を見れば、其發心の時、天主は、格外の靈慰を賜ひて、世物繼慕の情を、解き給ひけり。神愛、一たび心に發り、諸德、繁盛すれば、卽ち、安慰を奪ひ給ひて、心を乾燥せしめ給ひ、以て謙遜、耐忍等の德を、脩めしめ給ひ、以て專ら、己に事へしめ給ひて、漸々聖寵と、光榮とを、增さしめ給ひけり。然らば、安慰は、患難の前兆なり。安慰あれば、必ず誘惑あらん。故にこう、聖者等は、安慰の時は、誘惑に備へよ。治を以て、亂に備ふる如く、してよ」と勸告すれ。

二　若し吾曹、安慰を、正しく用ゐることを知りて、善く用ゐれば、天主、又重ねて賜へる時は、感恩の心、大謝の念を以て、受けて、大に靈益を得んかし。若し、感情を發して、滿悅せしめ、靈味を與へて、勸樂せしめ給はんことをのみ、天主に請ひ奉らば、自愛渾淆して、正しからず。時に飲み、時に食ひ、時に寢み、時に息ふは、生命を保つに、必要あれば、罪なしと、雖も、快樂を

感ぜんことをのみ、志せば、罪あり、祈禱默想するにも、霊慰、霊味を感ぜんことをのみ、志すは、過望にして、罪なり。然らば、霊慰、霊味は、既に述べたる、天主の聖旨に翕合し奉らん目的に、達かん手段として、願ひて、心を滿悅せしめん手段としては、願ふ可からず。患者、久しく必要の食味を失ひて、身体疲勞し居らんに、忽ち食欲發り、食味を感ゆれば、必ず大に悅ばん。身体を養ひ、筋力を增して、健康を恢復せんと、知ればなり。精忠を盡して、天主に事へ奉る者の、霊味を願ふも、天國の清涼を得て、心力を增し、奮然汗血を流して、德の難路を進みて、敢て外道を踐まざる爲なり。然らば霊味は、天主に事へ奉りて、其光榮を讃美し奉らん目的を以て、願ふべし。歡樂を得ん目的を以て、願ふ可からず。

三　前樣に述べたる目的を以て、霊慰を願ふは、極めて善なれども、願、度を過せば、私愛を渾淆せん。譬へば、煩願、急請し奉りて、得されば、甚しく

喜ばず、天主の聖旨にも翕合し奉らずして、却て、私情を熾にし、貪望を恣にして、怨念を發して、安心、耐忍せざる類なり。蓋し、寛願は、ずべし、急請は、す可からず、縱ひ、天主賜はざるも、敢て、心を煩はし、意を亂して、天主の聖旨に、翕合せざる可からざる要務を、害ふ可からざればなり。專ら天主の聖旨に從ひ奉りて、他念なきは、霊慰、霊味を獲て樂まんより、遙に勝れることにこころあれ。

四　正しく念禱し、霊味を感ぜんて、心を平和、安定し得ん天惠も、煩願、急請して、得されば、不平、不快の念を發し、心を亂して、天主の聖旨に翕合し奉らざるに、至ることあらば、是、霊樂、霊慰を願ふに異ならず。實、篤信の心を發し、歡樂の情を感ゆることのみ、霊樂、霊慰にあらず。念禱の本質を得、心情を歛め、注意を盡し、安々、靜々として、久しく念禱し得ん天惠も、霊樂、霊慰なり。霊樂、霊慰なしと雖も、妄願を制し、不平を抑へて、全く天主の聖

旨に、翕合し奉らざる可からざる由を、述ぶるぞ、此章の本意なる。抑々念禱の本質を得、其効果を脩めたる者にしあらば、誰か五官に觸るゝ安慰、快樂を輕棄し得ざらん。感情の安慰、心念の篤信は、念禱の本質にあらざるなり。念禱すれども、心乾燥して、愛情發らず、昔日、天主の、ジュデア人民を、「我、爾曹に、天を鐵となし、地を銅となさん」と（Levit. 26. 19.）曰ひて、呪詛し給ひし如く、咀詛し給ひて、退き給へる如き感ある時、其心を支握して動かざるぞ、念禱の本賴なりける。此地位に在る者には、天は實に鐵の如く、地は銅の如く乾燥して、一點露の清涼なく、心念眞に凋みて、少も實らず。常に亂れて姑も安せず。唯奇異の思をなして、念禱することあり。斯る時は、各種の誘惑に苦虐せらるゝが如く、感ゆる者なり。かゝる境界に在る者に、「耶蘇、基督の死去を念じ、磔刑を想へば、心安定せん」と勸告すれば、即ち曰ふ、「余、善く是を知る。知れども、力能く行ひ得くべもあらず。行ひ得ば、

如何で他の勸告を待たん」と云ふ。妄想發れども、制せず、制すれども、退けずして、此境遇に陷りたるなり。斯る境遇にも、天主の聖旨には、必ず翕合せざる可からず。

五　此境遇は、祈禱、默想に專心なる人の、或は哀祈の根底、或は憂慮の源因ところなれ。蓋し、祈禱、默想に專心なる人は、其祈禱、默想の如何に據て、若くば其日、若しくば其餘年の行爲を左右し、自も、斜ならず善德に進み、他も、善く薫陶し得んと、想へばなり。善く祈禱、默想し得ざれば、即ち、天主に放棄せられずやと、思ひて、愁ふ。天主に昵近し、奉り、和親し奉ることを能はずと、視れば、即ち、聖寵も、親愛も、全く失はずやと、恐るゝなり。此恐、彼愁、心に發れば、危隱の魔誘、漸く襲ひ來る。魔誘襲ひ來れば、即ち謂く「嗚呼、天主の吾曹を待ち給ふこと、輕聊なる哉。情なる哉。天主は、祈禱、默想を廢めさせ給ふか。嗚呼吾曹の祈禱、默想は、効果寡き哉。祈禱、默想は、吾曹に、

適はざるか」と謂ひて、天主を怨み奉るなり。此機に乘りて魔鬼は、更に苦待せんと欲して、犯し〻罪を、悉く明示して、天主に放棄せられ奉れる狀を、細に現はすなり。此を思ひ、彼を視て、思念亂れて、煩悶頻に發りて、終に祈禱、默想を廢して、安心し、以て苦刑を遁れたるが如き狀態と、なるに至る。而て、祈禱、默想とし言へば、自ら爲るは、忍ぶこと能はざるのみならず。他の爲ることも、忍ぶこと能はざるに至る。吾曹は、今、天主の聖寵に賴り奉りて、斯る人の憂悶を除き、魔誘を退くる方法を、漸々記述せん。

第二十四章　心の乾燥したる人の、憂悶を除く方法

一　天主の吾曹に近き給へば、吾曹は常に、自ら樂を惑ひ、遠かり給へば、苦を感ゆれば、天主の近き給ひては、歡喜し、遠かり給ひては、憂悶せざ

ること能はず。耶蘇基督も、十字架上に在し〻時、聖心の靈慰悉く斷ちて、深く憂悶し給ひければ、天主聖父に哀訴し給ひて「我天主よ、我天主よ、主は如何我を棄て給ふか」と（Matth. 27, 46.）曰ひて、心力を强め給ひけり。天主は常に、親ら選立し給ふ人を、試探し給へば、吾曹は、勇しく此試探を忍び、以て善効を脩めて「余、欲し奉るまにまにし給はず、主の欲し給ふまにまにし給へ」と（Matth. 26, 39.）念誦して、心力を强めて、天主の聖旨に翕合し奉らざる可からず。吾曹は、設令、多く安慰、靈味を得て、高く念禱の妙境に進むと雖も、若し眞愛なければ、基督教の完德も、脩め得ず、完善にも、進み得ざらん。此眞愛を脩めんには、憂事も、逆事も、安事、順事と均しく、甘じて忍びて、密に天主の聖旨に、和親、翕合し奉らざる可からず。故に吾曹は、患難に遭ひて、憂ふるも、天主に遺棄せられて、孤立するも、安慰を享けて、樂しみ、恩惠を蒙りて、喜ぶと均しく、甘じて忍びて「主よ、余を幽暗の中に、

置き給ふとも、主は、讃美せられ給へ。光明の中に、置き給ふとも、讃美せられ給へ。安慰を得せしめんと、欲し給ふとも、讃美せられ給へ。困難に沈めんと、欲し給ふとも、讃美せられ給へ」と（De imit. L. 3. c. 17.）謂ひて、均しく大謝し奉らざる可からず。使徒ポーロ、吾曹に勸告して曰く「萬事天主に感謝し奉れ。天主は、爾曹の萬事、耶蘇基督に因て、行はんことを、欲し給へばなり」と（1. Thess. 5, 18）云へり。天主の聖旨は、斯の如くならば、吾曹の、生くるも、死するも、天主の聖旨に協ひ奉る爲にして、幸に、正しく聖旨に協ひ奉れば、更に外に願ふ可き者、ある可からず。然らば、天主は、吾曹に貧困にして、世を送らしめんと、欲し給はゞ、吾曹は貧困に送る理あれども、富貴に送る理なし。故に天主、某に、安樂に世を送らしめ給ひ、某に、憂慮に送らしめ給へども、心眼を開きて、正理を視る人は、己の地位に安じて、他の地位を羨望せず。師父アビラ曰く「天主若し吾曹の心眼を開き給はゞ、天地の

間に、散在する者多けれども、天主の聖旨を遠かり奉る者たらば、吾曹の、願はしき者一もなし。若し聖旨に近き奉る者たらば、最下無値の者も、最上高價を得んと、明白に視んの天主の聖旨を違かり奉りて、想像にも及ばざる安慰を得て、靜思、歡樂せんより、聖旨に翕合し奉りて、心悲哀、乾燥して、魔鬼に虐待せられんこと、願はしけれ」と（In and. filia c. 16）云へり。

二　人常に曰へらく「吾曹の世に在るは、天主の聖旨を行ひ奉る爲なれば、聖旨に翕合し奉るより、更に願はしき者なし。故に吾曹は、困難、憂苦を忍ばしめんと、欲し給ふ天主の聖旨を、認め奉れば、餘命長くして、困難、憂苦は、酷しと雖も、欣然忍びて、敢て辭まず、正しく其聖旨に翕合し奉りて、安靜すべけれども、天主の欲し給ふ所は、吾曹の誠心を收め、精意を盡して、祈禱、默想することにころあれ。然れども、奈何せん、私慾强梁して、心收らず。常に冷淡、乾燥して、欲する如く、祈禱、默想に注意、熱心することを能

はず。是を想へば、心の憂苦忍び難し」と云ふ。是世人の稀ならざる哀訴なり。辯明して、會得せしむれば、獲る所必ず多からん。抑も、有德、完全にして、大聖と稱せらるゝ人も、心乾燥して、憂苦しけり。聖者フランシコ、セナの聖女カタリナ等は、天主に特待せられ奉りし人なれども、心大に乾燥して、憂苦しき。聖者アントニオは、祈禱、默想に熱心して、夜を短しと、歎き、日の登るを速しと、怨みし人なれども、妄念に苦しめられて、容易に退くること能はず、天主に哀訴し奉りて曰へらく「主よ、余、完全の人と、成らんと欲すればころ、日夜力むれども、妄念頻に發りて、余を迷はすなりと云へり。聖者ベルナルドも、哀訴し奉りて曰く「吾心寒くして乳の如く凝りぬ一滴の水なく、大旱の地の如く、なりぬ。痛悔し、悲哀せんと欲すれども、感動せず。頌歌すれども、興味なく、讀書し、念禱すれども、感味なし。常に樂しく行ひし默想も、行ひ得ず、嗚呼、吾心の歡樂は、何處にか適きぬる。吾心の

恬靜は、何處にか去りぬる。聖靈の安慰、平和は、何處にかある」」(Ber, ser. 54, sup. cantic.)云へり。大聖すら尙然り、況や常人や。

三　祈禱、默想すれども、心乾きて、愛情發らず、思亂れて、定らず、靈味も感ぜざるは、犯し、罪惡あればなり。固て天主は、吾曹の、犯し、罪惡、過失、怠慢等を罰せんと欲し給て、祈禱默想を、容易にせしめ給はず、注意を飲ぎ、思念を亂し給ふと、推考することころ、肝要なれ、此等の憂苦に遇ふとも、專ら天主の聖旨に翕合し奉りて、甘じて忍びて、敢て天主を怨み奉る可からず。吾曹の過去の罪惡、現在の怠慢、過失重ければこそ、天主の懲罰を受け奉るに及びぬれ。言へることあり「我、汝の言に因て、汝を刑なふ」と(Luc. 19. 22)なり。吾曹は實に、屢々罪を犯して、地獄の永刑に處せらるゝに適へり。此刑罰は、輕からざれども、罪惡に比ぶれば、重からず。吾曹に、常に曰ふ「患難、憂苦は、天主の垂れ給ふ全慈、全善の結果なり。懲罰は、特惠な

り。天主は、後世に到て、大赦せんと欲し給ひて、今世にありて、小罰し給ふと言ふ。言へども、行なく、念慮錯亂して、定らず。心天は、鐵の如く、意地は、銅の如く乾燥して、祈禱、默想の眞味を感ぜず。天主を遠ざかり奉りて、孤立の感あるは、吾曹の過去の罪、現在の過を、天主の懲さんと、欲し給へばなり。吾曹は、罪を犯して、刑なはるゝに及べども、刑は、罪より輕くして、却て、天主の正義、仁慈こゝろ溢るれ。嚮に天主は、吾曹の心の門前に立ち給ひて、默示を以て、屢々門扉を叩き給ひたれども、吾曹は、聾者となりて、聽き奉らず、默示を棄て奉りたり。今、天主を呼び奉れども、天主は、聾者に擬し給ひて、聞き給はず。叩き奉れども、開き給はざるは、正義ならずや。正義に因て、刑なひ給へども、其刑は罪の重に及はざるは、仁慈ならずや。然らば、吾曹は、刑は、如何なりとも、感謝の心を以て、忍受して、天主の聖旨に翕合し奉らざる可からず。吾曹は、大罪を犯して、地獄の永苦に刑なはる可き者なり。

如何安慰を請ひ、祈禱、默想の特惠を、求め奉ることを得ん。如何、天主に昵近し奉りて、安靜、平和を得て、樂しみ奉らんと、請ひ奉ることを得ん。安靜、和平は、天主の、特更に愛し給ふ人に、賜ふ恩典なり。此恩典を受け奉らずとも、如何天主を、怨み奉ることを得ん。此恩典を受け奉らずして、天主を怨み奉るは、敢爲、過望の甚しき業ならずや。吾曹は、過太の缺所あれども、天主は、忍容して放棄し給はず。且へ、自己の尊前に留めて、親しみ給へるは、廣大なる特恩優賞ならずや。故に、吾曹は若し、聊かにても、眞の謙遜の心あらば、天主の吾曹を待ち給ふことの、嚴酷に見ゆと雖も、甘受、忍耐して、敢て、天主を怨み奉ることなからん。

第二十五章　如何せば、心の乾燥、倦怠を、有益の念禱となさん。

一　吾曹は、心乾燥、倦怠すと雖も、敢て怨まず、撓まず、奮然忍びて、高妙の念禱となして、靈益を脩めざる可からず。第五編、第十九章に述べたる如く、祈禱、默想すれども、心乾燥、倦怠して、靈味を覺ねずば、精誠を極めて、天主に向ひ奉りて「主よ、余過ちぬる故、心乾燥、倦怠しぬれば、篤く痛悔す。主は、吾罪を懲さんと欲し給ひて、吾心を乾燥、倦怠せしめ給へば、余甘じて忍びて、敢て不平を鳴さず、寧、今日のみならず、餘命永しと雖も、勇然忍受して、敢て辭まず」と曰ひて、常に天主に謝し奉らざる可からず。而して天主の聖旨に讓任し奉りて、安ずる耐忍、謙遜の心は、祈禱、默想すれども、散亂して収らず、怨望、憂慮する心よりは、天主の聖旨に協ひ奉るなり。二位の子あり。一位は、父の與ふる財産に安じて、毫も不滿の色なし。一位は、不足として、常に不平の聲絶ゑず。父は、熟れか愛しみ、熟れか疏ずる。父の與ふる財産に安じて、不滿の色なき子こそ、父の意に協ひて、篤く愛しま

る。吾曹は、天主の兒女なり。温和順良にして、患難をも、憂苦をも、甘じて忍びて、天主の聖旨に翕合し奉る者は、患難、憂苦を忍ぶこと能はずして、怨望、不滿の色ある者より、篤く天主の聖意に協ひ奉るなり。乞者、富者の門に立て、哀を請ふ。富者聞かず、聞けども、直に施さゝれば即ち、罵詈、誹謗するあり。富者聞ざれども、敢て迫らず。寒天にも、災天にも、雨にも、晴にも門に立ちて、施すと、施さゝるとは、全く富者の旨に任せて、堅忍するあり。彼は、富者に憤怨を發さしめ、此は、惻怛、慈愛の心を、發さしむ。吾曹の哀を天主に請ひ奉ることも、是と異ならず。

二　祈禱、默想の高妙にして、大効ありて、善く天主の聖意に協ひ奉ることの、如何なるかを、知らんと欲すれば、忠難、憂苦に遭ひて、甘じて忍ひて、敢て辭まず、專ら天主の聖旨に翕合し奉りて、誠心、精意、愛慕し奉るこそとよりも、大効ありや、あらずや、と自ら問へ。必ず「無し」と答へん。吾曹は、此

効果を脩めんと、欲してころ、念禱すれ。天主は、吾曹の心情を乾かして、祈禱、默想の眞味を、感ぜさせ給はず、放棄して、孤立せしめ給へども、吾曹は、沮止、落膽せず、勇然として、忍びて、只管天主の聖旨に、翕合し奉ることとろ、耐忍、主愛の最大の業なれ。自ら愛慕する者の爲に、苦を嘗め、勞を忍ぶより、愛の現はるゝは、なければなり。苦勞愈々大なれば、愛も隨て大なり。心乾かさて、靈味を覺ゑず。天主に拋棄せられて、孤立の感あるは、誠心を極め精意を盡して、天主に事へ奉る者の、最大の患難、最重の苦架、最刻の克己なり。蓋し、身体の患難は、常に、利益、康安、名譽等の大望に因て起りて、漸く積極に進めども、心靈の苦患に比ぶれば、最輕るければなり。斯苦患に遇へども、誠心精意天主の聖旨に翕合し奉る者は、天主聖父に、遺棄せられ給ひて、太く靈憂を忍び給へる救主基督を、學び奉りて、耐忍、主愛の深遠なる行爲を舉げ、以て美妙、有益の念禱、高妙、完備の成德を脩めてころ、

致命の美名をも、得るなりけれ（Blos. in speculo spirit. c. 5.）。

三　吾曹は、祈禱、默想して、深妙の謙德を脩めて、己を認めんことを、屢々天主に請ひ奉りぬ。天主は、吾曹の請を容れ給ひて、心を乾かし、靈味を除き給ひて、己を認めさせ給ひたり「犯し、罪を、篤く悔恨、痛哀するぞ、己を認むることとなる」と曰ふ人あれども、否らず、犯し、罪を、天主の吾曹に悔恨、哀痛せしめ給へばころ、吾曹は、悔恨、哀痛し得れども、自は、悔恨、哀痛し得ざるなり。靈狀を吾曹に、天主の認めさせ給へばころ、吾曹は、認め得れども、自は、認め得ざるなり。心を巖石の如く、堅硬にして、一滴の水をも、出さしめざることは、吾曹の能くし得ることなれども、此心を穿ちて、水を出すことは、天主のみ能し給ふこと、猶往昔、契約の地に趣きけるジュデア人民の、アラビアの曠野にて、水なくして苦しめる時、モイゼスに命じ給ひて、巖石より噴水せしめて、以て其恩を識らしめ、自己等の狀を、認

めしめ給ひし如し。斯水を、天主の出し給へばこゝ卽ち、吾曹は、認めて己の狀を識るなりけれ。此認ぞ、萬善の基、茂德の母なる。心乾きて、靈味を感じず、鬱悶してこゝ、吾曹、容易に、己を認むれ。吾曹、祈禱、默想して、此効果を脩め得れば、更に外に、何をか求めん。

第廿六章　心乾燥、困倦して、祈禱、默想の靈味を感じずとも、天主の聖旨に翕合し奉りて、安せざる可からず。

一　心乾燥、困倦して、祈禱、默想すれども、愛情の發らざるは、犯し、罪に由ると思へば、必ず慚愧して、深く謙遜すべけれども、啻、犯し、罪のみに由らず、吾曹の測知し得ざる、天主の攝理にも由ると、信せざる可からず。天主は、聖旨の欲し給ふ所に從ひて、恩典を、或は與へ給ひ、或は與へ給

はざるなり。吾曹の身体は、啻、頭手の貴肢をのみ以て、組織せられず、脚脛の賤肢を以ても、組織せらる。聖會も、貴肢卽ち、第五編第十九章に述べたる、祈禱、默想の高妙の域に、進、みたる人をのみ以て、組織せられず、未だ此域に進まざる人を以ても、組織せらる。此域に進まざる人は、適はされば、天主、進め給はざるが如く、見ゆれども、此域に適ひても、他域に進め給へば、更に高く進み得んと、天主は、善く知し召し給へば、他域に進めて、此域には、進め給はざるなり。大聖と稱せらるゝ人も、此高妙の域に進みたりや、知る可からず。進みたりけめども、重みせず、使徒ポーロと、耶蘇基督の十字架の外、余、誇る所なし」と（Gal. 6, 14.）曰ひて、顧みざりしなりけめ。

二　師父アビラ曰く「天主は、某には、數年、某には、生涯、心の安樂を絶ち給ふとも、天主の攝理の秩序を、正當なりと、確信して、堅忍を以て凌がば、安樂を有つより善し」と（Tom. 2. epis. f. 22.）云へり。吾曹若し、己の現在の地、

位を、善しと知らば、天主の聖旨に、翕合し奉ること、最容易ならん。聖者等特に聖者オグスチノ、聖者ヒエロニモ、聖者グレゴリオ等は、善く此義を證しぬ。此聖者等の垂教、示訓に據れば、最上の深理を、靜思する高思を蒙れる者は、謙遜するに適はず。若し吾曹は、此高恩を蒙り奉らば、既に高く靈事に進みたりと、信じて、己を、盛德、完全の人と、或は均しくせん、或は其上に進めん。而て祈禱、默想すれども、痛悔の涙の一滴も、流し得ざらん。使徒ポーロは、天主の默啓を蒙り奉りて、虛誇に誘はれん傾向ありけり。此誘を制して、心氣を平にせざる可からざりき。此意を、示さんと欲して曰く「余、蒙り奉れる默啓、大きなれば、余を誇らざらしめんと、吾肉の芒刺即ち、余を擊つ惡魔の使者は、遣されぬ」と（2 cor. 12, 7.）云へり。使徒は、第三層の天まで登りて、玄奥の默啓を蒙り奉りけり。默啓、玄奥なれば、驕心發りて、害あらんかと、天主は、慮り給ひて、邪念の誘惑を生し給ひて、其羸弱

なることを、示し給ひて、謙遜せしめ給ひき。靜思の道は、高妙なれども、確乎ならず、衆人にも適はざれば、天主は親ら吾曹の、終局の目的となり給ひて、己に向ひて、直線に進ましめんと、欲し給ひて、吾曹衆人に適當、確乎なる道を設け給へり。若し吾曹は、容易に祈禱、默想し得て、格外の靈味を覺ゆれば、驕傲の念發らん、心乾燥、困倦して、靈味とては、聊も覺えず、荒寂すれば、嫌遜して、自ら賤視せん。斯れば、正しく吾曹に適ひて、確乎なる道は、此道なり。此道を措きて、彼道を進まんと願はゞ願ふ所を知らざる者にこそ（Matth. 20, 22）

三　古聖ジョブ曰く「余に來れども、見えじ、去れども、覺えじ」と（Job. 9. 22）云へり。聖者グレゴリオ曰く「人、罪の爲に盲迷して、天主に近き奉れども、知らず。遠かり奉れども、覺えず。天主に近き奉る手段卽ち、聖寵を蒙り奉れりと、思はめども、天主の義怒に觸れ奉りて、遠かり奉る機會こそ、得

たらめ。天主の、義恕に觸れ奉りて、遠かりぬと、思はめども、特恩を蒙り奉りて、昵近こうし奉りたらめ。抑、念禱、靜想の高妙の域に進みて、日々新に、天主の思惠を蒙り奉ると視る者、誰か、常に、天主に昵近し奉ると、思はざらん。此恩惠を蒙り奉りて、已に傲らず、自ら怙まざる者は、稀なり。故に魔鬼は、吾曹に、天主に昵近し奉ると、思はしめて、漸く危險に誘ふなり。靈慰、心怡を飲ぎて、邪念、胃瀆等の誘惑に苦しめられて「余は、天主の義恕に觸れ奉れり。天主は、余を棄て給へり」と想ふ者は、已の羸弱なることを認めて、謙遜し、自力の恃む可からざることを辨へて、天主の聖力に依り奉れば、大に天主に昵近し奉るなり」と（L. 9. mor c. 7）云へり。斯れば、吾曹の善しと認めて、選定し、道は、常に吾曹に、適當せず、又確乎ならず。天主の吾曹に、撰定せしめ給へる道ぞ、善く吾曹に、適當して確乎なる。

四　祈禱、默想して、盡す可き力を盡し得ずして、鬱悶、悲哀を覺ゆるは、天主の特惠を蒙り奉りて、天主を愛し奉る證なれば、安せざる可からず。愛慕の意なければ、悲哀の念もなし。精忠に仕へんと欲する志なければ、仕、精忠ならずとも、遺憾なし。祈禱、默想して、盡す力足らずして、鬱悶、悲哀の生るも、精忠に天主に事へ奉らんと欲する志切なればなり。祈禱、默想等の聖務を盡すこと、懇切ならず。盡す可き力も、盡さずして、悲哀、魔悶も發らざるは、愛なければなり。若し吾曹は、鬱悶、悲哀の生ることわりて、其鬱悶、悲哀如何に大なりと雖も、こは天主の生し給へるにころと思へば、自ら和ぎて、悲哀も鬱悶も隨て減へらん。さらば、專ら天主の聖意に從ひ奉りて、其發し給ふ意志、願望の如く、誠意、精心天主に事へ奉りて、聖旨を默默ばしめ奉ること能はずとも、此意志、願望を發し給へることを、天主に大謝し奉りて、純ら聖旨に翕合し奉らざる可からず。

五　大臣、政廳に登りて、日々王前に出れば、王に奉事す。吾曹も、念禱の

座に坐りて、朝夕、天主の尊前に出で奉れば、天主に、事へ奉るなり。言へることあり「我を聽く者も、日々、我門を守る者も、我門を開くを俟つ者も、福者なり」と(Prov.8, 34.)なり。主の宮殿の門の、開くを俟ちて、其傍に、吾曹の在るは、天主の廣大無邊なる尊嚴にも、吾曹の身位の賤卑にも、盡す可き要務にも、善く適當す。若し、天主親ら、門を開き給はゞ、大謝し奉り、開き給はずば、余猶、天主に近き奉る功なしと、思ひて、謙遜せざる可からず。斯て、吾曹は、心、乾燥、罷困して、孤獨の感あれども、容易に天主の聖旨に、翕合し奉り得て「憂哀よ、患苦よ、余、爾曹に敬禮す、爾曹は、各種の天惠に滿てる哉」と(T. Barth. de martyr. Archiep. Braucar. in suo compend. c.26)吟誦して、欣然として、孤乏の感心を忍びて、天主に大謝し奉らずば、ある可からず。

第廿七章　心、乾燥、困倦して、靈味を感ぜずとも、祈禱、默想は、廢す可からず。

一　祈禱、默想すれども、心、乾燥、困倦して靈味を覺ぜず、孤獨の感ある を視て「小善にも、進むこと能はず、微德をも、脩むること能はず、妄に時日を費すのみ」と謂ひて、祈禱、默想を、或は全廢し、或は減少する者あり。魔鬼の誘惑に、陷れる者なり。此誘惑は、危險なり。祈禱、默想に熱心して、靈味を覺ぜて、安靜するまでは、敢て、怠らざれども、靈味失せ、心池亂るれば、卽ち、謂らく「是祈禱、にも非ず、默想にも非ず。天主の尊前に出で奉れども、注意もなく、敬心もなければ、新に罪を增すのみ。他の聖務を盡さば、更に善く、天主に事へ奉ることを得んと云ひて、祈禱、默想を廢するなり。魔鬼は、陰險深し、吾曹の心動き、情弱るを見れば、卽ち、妄念を發して、心池を亂し、情

波を蕩はして「久しく用ゐし時刻を、妄費せり」と思はせて、實祈禱、默想をのみならず、完德を脩めんと、欲する願望をも、救靈の要務をも、廢せしむるなり。斯類の魔誘に遭ひて、靈魂の損失を招げる者、尠からず。言へるとあり「卓膳の友も、必要の日には、留らじ」と（Eccli. 6, 10.）なり。人として、天主と樂しみ奉らんことを、欲せざる者、誰かあらん。天主の爲、勞を凌ぎ、苦を嘗めてこそ、眞に天主を愛し奉る者なれ。靈味を感じ、安慰を得れば、祈禱、默想を勉勵し、時刻も多く費せども、靈味も覺えず、安慰も得ざれば、勉勵も薄くし、時刻も少く費す者は、私慰、自愛の爲に、勉勵するなり。天主、靈味を惑はさせ給はず、心泉を涸らし、情淵を乾かし給へども、篤實に祈禱、默想して、怠らざる者は、天主の親友にして、專ら天主の聖旨を行ひ、天主を喜ばしめ奉らんことを、勉めて、苟も自益、私愛を求むることなし。斯れば、吾曹は、謙遜、耐忍を以て、恒に祈禱、默想に熱心し、定期の外、更に幾許の

時刻を添へて、孜孜と勉めて、怠らざれば、強剛、果毅の心生じて、容易に魔誘に克ち得てん。

二　賢哲パルラリオ曰く「余、嘗て、小室に閉居して、天事を靜思しぬ。心泉忽ち涸れて、雜念の泥塵頻に發り、退治すれども、能はず、廢止せんと思ひぬ。アレキサンデレア府の、聖者マカリオを誘ひ、心狀を具に述べ、訓戒を請ひぬ。聖者、懇諭して曰く「若し、雜念、汝を圍みて「汝、焦心、苦慮、靜思すとも、何の益あらん。當、時日を費すのみ」と曰はゞ、汝、毅然として、雜念に曰へ「余、耶蘇基督を愛し、奉らんと欲してこそ、此室壁を監れ」と云へと、懇諭せり」と（Palladius. in hist. Laus）云へり。此懇諭は、「基督の爲に、心を恒に、此脩業に、留ひることを得ば、縱ひ、靈味は、脩め得ずとも、餘ありと思へ」となり。吾曹も、常に斯類の魔誘に襲はれ、斯樣の妄念に圍まるゝ者なれば、此懇諭は、吾曹にも、善く適ふなり。靈味を覺え、快樂を獲るは、祈禱、默想の、最上の

目的にあらず。善行を擧げて、至尊、至聖の天主の聖旨に協ひ奉りて、聖意を快ばしめ奉りて、吾曹の天主にて在す聖主に、本分の精忠を盡し奉ることと、恩者にて在す聖主に、當分の聖務を盡し奉ることこそ、最上の目的なれ。然れば、心泉涸れて、情潤なく、靈菓の實る可き見なしと雖も、恒に心を靜め、意を留めて、祈禱、默想するは、天主の聖意に協ひ奉る善行なれば、孜々と勉めて、弛む可からず。

三　セナの聖女カタリナの傳紀を閲れば、聖女の、嚮に有し聖慰は、全く失せ、妄念切に發りて、心を亂せり。百方退治せんとすれども、能はずして、憂慮に沈みぬ。然れども、通常の祈禱、默想は、毫も怠らず、更に焦思、苦慮して、己を責めて曰く「嗚呼、余は、惘然に堪へたる罪人なり。如何、天主の安慰を、受け奉ることを得ん。幽暗の裏、苦患の中に、世を送るとも、永苦に刑せられずば、幸福ならずや。汝、專ら天主に事へ奉りて、後世の快樂を享け奉らんと、身靈を天主に委ねしにあらずや。奮厲して、弛むこと勿れ。恒心を以て、汝の聖務を盡し、精忠にして至尊の聖主に事へ奉れ」と（Blos. c. 4 mo-nit. spirit.）云ひしとあり。

四　吾曹も、聖者マカリオの懇諭を學び、聖女カタリナの遺表を習ひ、且、輕世金書の「主よ、甘じて世の安慰を斷つべ、吾安慰なる。主の安慰は欲ぐとも、主の聖旨と、正試さへ得れば、余安慰す」との（De imit. Chr. L. 3. c. 16.）善訓に據りて、勇氣を養はざる可からず。天主安慰を絶たんと欲し給はば、吾曹は、聖旨を體し奉りて、安慰を斷ちて、欣然として、悅ばざる可からず。此悅ごそ、完全、無缺にして、世の奪ふこと、能はざる悅なりけれ。

第廿八章　聖賢の遺表を擧げて、前章の事實を證す。

一　聖者ドミニコ會の、編年史を閲れば、一位の惰士あり、數十年の間、專ら惰行に心力を盡して、弛怠あらず、行爲收まりて、惰友の摸範となりぬ。然れども、靈慰とては、聊も覺ぼざりき。天主の、他を惠み給ふ恩典、與へ給へる、靈慰等の談話を、聽きては、常に異しみぬ。遂に、安慰次きを憂ひたり。一夜、定課の後、苦像の前に跪き、痛く哀訴して曰く「主よ、主は、全善、温和、仁慈に在して、萬物を起過し給ふと、余常に聽きぬ。主の爲に、患難として、凌がざるはなく、憂苦として、背めざるはなし。主に事へ奉れる四分一時を以て、國君に事ふれば、苦虐の君と雖も、寛大に待ち、篤寛に談話して、愛意を示し、こと、既に幾度か知らず。嗚呼、主は、實に、國君にも如き給はず。主は、他を篤く惠み給へども、余をば惠み給はず。他には、最敦厚、仁慈に在して、余には、最稀薄、無情に在せり。如何なればか」と云へり。言未だ全く訖らず、轟然として聲あり。聖殿も、顚覆せんかと、思はる。惰士、胆顫ひ、心驚き

て、頭を回して顧れば、魔鬼、鐵椎を携げて、後に立てり。憤然として、惰士を擊ちぬ。惰士、卽ち倒れぬ。渾身疼痛して、筋骨碎くるが如し。起たんとすれども、能はず、辛くして、傍の祭壇まで進み、更に一歩も進むこと能はざりき。惰友、夜半一時の課を、誦へんと來たり、其半死半生となりて、伏るを見て、大に驚きて、病室に伴ひぬ。治療三週間を過れども、疼痛猶減らず、且へ、臭氣發りて、人、敢て近くこと能はざりき。更に數十日を經て、筋力少しく復り、身体漸く動きぬれば、不遜を以て、重傷を蒙りし所に、至りて、藥石を求めんと、惴々として、又苦像の前に、往きぬ。愧氣、心に滿ち、全身慄き、流涕已まず。篤く己の悲を認め、憂々として、亦哀訴して曰く「余、大罪人なり。大罰を受くる罪われども、恩賞を受くる功なし」と云へり。卽又聲あり曰く「汝若し、安慰を得、快樂を享けんと欲すれば、汝の、下賤卑薄なる昆蟲、泥土にも如ずと、認めざる可からず」と云へり。惰士、此訓戒を受け、思望を改め

て、奮勵しければ、德行、大に修まり、久しからずして、完全の德域に、達きけりと（Hist. ord. praed 1. p. 1. i. d. 60）あり。

二　聖者イギナシオの行實を閲れば、聖者は、前段の脩士とは、大に異なり。聖者は、常に犯じ、罪を視、篤く痛悔して、流涕止まざりき。主に懇請し奉りて曰らく「主よ、快樂を奪ひ、安慰を絶ち、懲罰を加へ給ひて、誠心、精意、主に事へ奉らしめ給へ」と云へり。聖者、罪を犯せりと思ひて、罪の懲罰を受けんと、欲する念、愈々長じければ、主の現はし給へる仁惠も、愈々長じけり。聖者、感喜に堪へずして曰らく「余、屢々罪を犯して、天主を背き奉りたれども、余と均しく、屢々天主の恩惠を蒙り奉りける者を、未だ見聞せず」と（In ejus vita L. 5, c. 1.）云へり。

三　賢哲プロジオ記載す「有德の人あり、祈禱默想に熱心して、著しき天光を蒙りぬ。更に天主の聖意を悅ばしめ奉らんと欲して「主よ、主の聖

旨に協ひ給はば、此恩典を絶ち給へ」と、謙遜を以て、懇請し奉れり。天主、此請を容れ給ひて、安慰を悉く奪ひ給へば、常に魔鬼に誘はれ、心泉頻に乾涸し、憂苦、煩悶切に發りて、一点の安慰も感ぜざりき。斯て五年を經けり。一日、憂悶特に甚しく悲哀に堪へずして、流涕、痛哭しけり。二位の天使現はれて、慰藉す。強く辭みて、受けずして曰く「余、天主の聖旨の行はれ給はんことを求めて、慰藉を求めず。求むる所を得るところ、吾慰藉なれ」と（Blog. p. 10 mon. spiritual.）云ひしとぞ。

四　賢哲又記載す。一日、聖女ピリッタ煩悶す。耶蘇基督、聖女に現はれ給ひて「如何なれば、煩悶す」と曰ふ。「諸の惡念、吾心を亂して、去らず。主の審判を示して懼れしむれば、なり」と答ふ。「汝、前に、我旨に悖りて、世の虛榮を得て、樂しめり。今、諸々の惡念發りて、汝の旨に悖りて、煩はしむる、至當ならずや。我審判は、懼れざる可からざれども、懼れ過す勿れ。唯、專心我に

依れ。我は、汝の主なり。惡念は、人の厭惡、抵抗する者なれども、今は、靈魂を煉淨して、後は報賞を加ふる者なり。惡念を悉く退くること、能はずば、精意を盡して、以て抗爭し、堅忍を擧げて、以て凌げ。抗爭すとも、自力を恃みて、驕傲に陷ること勿れ。堅忍すとも、耐力に誇りて、緩怠に傾くこと勿れ。主の聖寵に賴らずば、誰か久しく、其德を有ち得んと(Ibid. C. 4.)云へりとなり。

五　賢哲トレロの傳紀を見れば、美事あり。久しく憂戚に沈める者あり。賢哲を訪ひて曰く「余、種々の憂戚に遇ひ、痛辛、悲哀に堪へずと云ふ。賢哲曰ふ「善き哉汝の憂戚に遇ふことや。憂戚は、天主の降し給はずば、少も吾曹に來ず」訪へる者曰ふ「天主の降し給ふとは見ねず。吾罪こそ招きけめ」賢哲云ふ「汝の罪招くも、招かざるも皆、天主の聖計なりと、確信して、天主に大謝し奉れ。耐忍を以て凌ぎて、天主に讓任し奉れ。訪へる者云ふ「天主に讓任し奉れども、心池乾燥して、憂戚に堪へず」賢哲曰ふ「耐忍を以て、凌がば、敦厚の信心ある時より、篤き聖寵を蒙り奉らん」と(Tauler. in pusil. consolat.)云へり。

六　篤實に、天主に事へ奉りし人ありけり。一日、語りて曰く「四十餘年、祈禱默想に熱心して、天主に事へ奉りたれども、聊の安慰をも、快樂をも、未だ感ぜざりき。祈禱默想に熱心し、時は、心力を得て、他の聖務も、容易に盡し得たれども、怠りし時は、大に弱りて、善事は更なり、一個の羽だに、擧ぐること能はざりき」と云ひしとぞ。

第廿九章　通常の德、起性の惠

安じて天主の聖旨に翕合し奉る。

一　祈禱、默想には、眞味、安慰の有るも、無きも、善く安じて、天主の聖旨に、翕合し奉らざる可からざるが如く、他の通常の德にも、起性の惠にも、多寡となく、大小となく、善く安じて、聖旨に翕合し奉らざる可らず。德を切に願ひ、專ら之に心を趣けて、脩めんと厲むは、善し。脩めんと、切に願ひ、篤く勉めて、脩め得ずとも、敢て心を亂さず、天主の聖旨に安じて、之に翕合し奉るは、更に善し。天主は、吾曹を謙遜せしめんと、天使に賜へる清淨に彷彿たる清淨を、吾曹には與へ給はず。却て、邪念の誘惑を發して、試し給はば、小心翼々として、天主の聖旨に安じて、懇に之に翕合し奉るは、此德なきを憂ひて、心を亂して、怨むより善し。嘗て、アレジオの聖者フランシスコに、與へ給ひし謙遜、古聖モイゼス、聖王ダビド等に、授け給ひし溫和、古聖ジョブに賜ひし耐忍、依靠等の德を、今、吾曹には賜はず、却て、惑誘を發して、苦しめ給ふとも、已の賤位を認むる機會として、忍受して、氣を

平げ、心を安じて、敢て怨む可からず。師父アビラ曰く「有德、大聖と雖も、猶更に遣まんと、願はざるはなし。然れども、願、私望に出でずして、天主を愛し奉らん正心に出づれば、毫も心の安和を失はず。天主の賜へる恩惠、多からずとも、純然安じて、敢て多を願はざるなり。蓋し、多恩を願ふは、正しく天主に事へ奉る道なり」と私愛は、勸むれども、受け奉れる恩に安じて、多を願はざるぞ、天主の聖旨にも協ひ奉りて、眞の愛も現はるゝと、知れはなり」と（C. 22. in Audi. filia）云へり。

二　前段の敎訓に據れば、更に德を脩め、更に善に進まんと、願ふは、美はしからず。靈魂も、身體も、天主に讓任し奉りて、苟も願はざるぞ、美はしさが如し。心力を弛め、冷淡に陷りて、完德を脩めん奮厲を、妨けずや」と言ふ人あり、此問題や、最重にして、又最大の弊害生りて、苟も輕視す可からざる問題なり。抑も高妙、深遠なる敎訓も、之を應用することを知らずし

て應用せんとする者は、必ず濫用す。此編の記事も、念禱の編の記事も、他徳に關はる記事も、皆然らざるはなし。故に明説して、眞義を知らしむるぞ、最切肝要なる。抑々吾曹が、靈魂も、身体も、天主に讓任し奉るは、徳を脩め、善に進みて、完全の域に達かんと、欲してなり。故に、靈事も、身事と均しく、煩願、急請して、平和、安静を破りて、天主の聖旨に翕合し奉る機を、失ふこと勿れとこそ、訓戒すれ。日々新に、徳を脩め、善に進みて、完全の城に達かんと、願ふこと勿れ。有徳積善の人の遺跡を、倣ふこと勿れ」とは訓戒せざるなり。耶蘇基督、弟子等を訓戒し給ひて曰く「何をか食ひ、何をか衣んと、衣食を慮ることと勿れ」と（Matth. 6. 25.）云へり。師父等の説に據れば、耶蘇基督は、衣食を温和、適當に慮るを、戒め給はず。煩願、急請することを、戒め給へり。言へることわり。顔に汗して、食へ」と（Gen. 3, 19.）なり。勞動して、衣食を求めんことを、天主は、元祖に命じ給へり。吾曹は若し、勞動せずして、

衣食を賜はらんことを、天主に望み奉らば、天主を試し奉るなり。豈誤てることならずや。靈事も、身事と均しく、力を盡し、慮を極めて、求めざる可からず。盡力、極慮しても、志す徳を、脩むることと能はずとも、不忍の念を發さず、更に精力を盡し、誠意を極めて、脩めて、苟も落膽す可からず。設令不幸にして、失つことありとも、毫も失望す可からず。勉めて脩むるは、吾曹の務なり。不幸にして失つも、吾曹の分なり。吾曹は、羸弱、窮困なる者にこそあれ。天使にもあらず。聖寵に圍繞せらるゝ確乎、不變の聖者にもあらず。天主は、吾曹の狀態を、細に知し召し給ふ。言へることあり「天主は、吾曹の由て造る所を、善く知し給ふ」と（Psal. 102, 14）なり。天主は、吾曹の軟弱なることを、善く知り給へば、吾曹の、若し不幸にして、失つことあらば、直に聖力を請ひ奉り、慚愧、痛悔して、内心を鎮め、外身を静めて、安せんことこそ、欲し給へ。落膽、失望することは、欲し給はざるなり。蓋し、勇氣を奮起し、

毅心を養成して、決然として興るは、天主を愛し奉らん爲、痛悔せんと謂ひ、正しく天主に事へ奉らず、罪を犯して聖旨に悖り奉れりと想ひて、憂悶するよりは、勝れば、なり。

三　既に述べたる事に據て見れば、「天主の行はしめ給はずば、吾曹は、自は、何事も行ひ得ざれば、更に進まんと精厲奮勉するも、すべなし」と謂ひて、祈禱、默想の記事を誤解して、心力を弛るめ、怠惰に陷る者、若しわらば、實に悼はしきことにろ。力の限を盡して、心の門を閉ぢて、怠惰の念を入れず、精厲、懇切に、此誘惑を退けて、現はす堅忍、謙遜は、完全の德をも、惰むること能はず、念禱をも行ひ得ずと、苦慮、哀訴する戚意、憂情に比ぶれば、遙に勝りて、天主をも、正しく、快ばしめ奉らん。蓋し、念禱を善くすることも、完德を脩むることも、天主の、其聖旨に協ひ奉る人にのみ、賜ふ恩惠なれば、吾曹は、如何に、盡力、焦思すとも、求め得ざれば、なり。天國に入りに

し人は、均しく、天主に救はれ奉れりと雖も、快樂均しからず。然れども、敢て落膽せず。吾曹も、完德の上域には、更なり。中域にも、進むこと能はずして、大聖と、均しからずと雖も、敢て、沮止、落膽せず、純ら天主の聖旨に、翕合し奉りて、永遠、無究の救靈の期望を、愛さしめ給ひし仁慈を、大謝し奉らざる可からず。過たず、世を送らんと欲して、能はずとも、敢て愛へず、過を認めさせ給へることを、天主に謝し奉らざる可からず。人の、稀に脩めし玄妙の德を、脩めて、天國に入ること能はずとも、罪惡を細に認識し、篤く痛悔して、衆人の、進みし途を進みて、入ることを得ば、滿足せざる可からず。聖者ヒエロニモ曰く「各人の、義殿に、献ぐる物品は、均しからず。金銀を献ぐるあり。玉石を献ぐるあり。麻布、緋紅、段紅等の織物を、献ぐるあれども、余は若し、山羊の皮若干を、献ぐることを得ば、滿足す」と（Hieron in prolog Galat.）云へり。完全の域に進みし人は、殊勝の德、最上の靜思を、天主に献

奉れども、吾曹は、罪惡に滿てりと、承認して、威嚴深く在す天主の尊前に、乞者の如く、畏敬、畏伏し奉りて、短所、過失を献げ奉ることを得ば、滿足せん。日々大恩を蒙り奉りて、感謝し奉らずとも、吾曹の、報恩の念なきことを、厭ひ給ひて、賜へる大恩を、天主の奪ひ給はざることを、大謝し奉らざる可からず。

四　聖者ボナベンツラ、賢哲ゼルソン等の、述べたる事あり。前段の義理を、善く證せり。曰く「衆人は常に、自ら欲する德を缺くと、知らば即ち、慚愧、謙遜して、熱心に、天主の聖佑を請ひ奉りて、補はんと勉めて、天主に事へ奉れども、飽かず、完しと知らば、驕心、惰念を發して、或は天主に事へ奉ることを勉めず、或は德としては、惰めざるなしと信じて、更に進むことを勉めず」と（Bonav. opus. de pruf. Relig. L. 1.C. 2. Gerson. tract. de monte confenpl. Bart. de martyr. in suo compl. p. 2. c. 5.）云へり。斯れば、吾曹は、自力に因て、惰め得可き事は、即ち完德は、精意、誠心惰めんに、若し、聖主の惰めさせ給はずとも、滿足して、敢て憂慮、怨望す可からず（Avila. T. 2. Epist. fol. 22.）。況や、自力に因て、惰め得ざる德を、聖主の惰めさせ給はずとて、愀思、恨倦す可けんや。

第三十章　榮福の大小にも安じて、天主の聖旨に翕合し奉らざる可からず。

一　吾曹は、貧、今世にて受け奉る、聖寵の多寡のみならず、後世にて受け奉らん、榮福の大小にも安じて、天主の聖旨に翕合し奉らずば、ある可からず。精忠に天主に事へ奉らん者は、已の益ありやなしやを、顧みず、唯、天主の聖旨の、行はれ給はんことをのみ、憶はざる可からず。輕世金書に曰く「大事にも、小事にも、身事にも、靈事にも、已の益を求めざるは、完德の

大なる者なり。蓋、主よ、主の聖旨と、光榮を得んと欲し給ふ願望とは、他愛の上に超ゆる可からず。人も、此聖旨と、願望とを以て、受け奉る恩惠の上に安慰、滿悅せざる可からざればなり」と(de imit. chr. l. 3. c. 22.)云へり。

二　天堂の聖旨、聖女等の、天主の聖旨の行はれ給ふを視奉りて、感ゆる滿悅、歡樂は、眞福を受けて、感ゆる滿悅、歡樂よりは、必ず、大ならんこと決し。彼等は、全く天主の聖愛に化せられて、純ら聖旨に親合し奉りて、自己をも、自己の享け奉る眞福をも、忘れて、顧みざるなり。故に、各々其福位に安じて、敢て上位をも懇望せず、嫉念をも發さゞるなり。蓋し、天主を面に視奉りて、全く其聖愛に化せられ、自己の旨を絶ち、天主の聖旨に隨ひ、天主の欲し給ふことを、己も欲すれば、天主の聖旨の在す所に、己の旨を進めて、歡喜、踴躍すればなり。古聖モイゼス、使徒ポーロ等は、實に此域に進みたりけり。他人を救はんと欲する懇情の、切なると、天主を讃美し奉らんと欲する願望とを、己も忘れたりき。モイゼス曰く「主よ、主は、此民の罪惡を赦し給へ。赦し給はずば、爾の錄し給へる吾名を、抹し給へ」と(Exod. 32. 32)云へり。使徒ポーロ曰く「余は、吾兄弟等の故に、耶蘇基督に、棄絶せられんことを、欲したり」と(Rom. 9. 3.)云へり。聖者マルチノ、死に臨みて、聖主を呼び奉りて曰く「主よ、余潤、聖主の民に必要あらば、敢て勞劬を辭まず」と云へり。榮福、眞樂を享け奉らんこと、確然にして近しと、知れども、丹誠を凝しつゝ、天主を讃美し奉り、精忠を盡しつゝ、事へ奉らんと欲する愛情、切なる爲、榮福、眞樂を輕じて、勞劬、困難を重じたりき。吾曹も斯てこそ、天主の聖旨の、天に行はれ給ふ如く、地に行ひ奉らめ。聖旨の行はれ給ふことを、專一の歡樂として、天地の如き巨大の自益をも、輕じて、聖旨に協ひ奉ることこそ、重せめ。

三　是に因て考ふれば、天主の聖旨に翕合し奉る事の、如何完全なるかは、吾曹の容易に知り得可きことにこそ。吾曹は若し、聖寵の惠をも、光榮の樂をも顧みず、專ら天主の聖旨に、翕合し奉らざる可からずば、如何か世利、名譽を棄てざらん。此編の初章に述べたる如く、長者の命に因て、彼此の處に居り、彼此の職務を執ることを喜ばず、甘じて病苦、孱弱を忍ばず、侮辱せられて、憂苦、愁傷に堪へずして、天主の聖旨に、翕合し奉らざる者は、此完德を脩むること能はず。吾曹は、多少の事を記述、編纂して以て、天主の聖旨に翕合し奉りて、天主を、悅ばしめ奉る事の、聖寵、光榮等の靈惠に愛ることを、證しはすれども、猶自は、最脆く、最亡び易き世物に、泥むなり。惜しき哉。天主を悅ばしめ奉り、聖旨を行ひ奉らんと欲して、上位の眞福を措きて、下位の眞福に就きて、安ずる者は、既に最愛の物を措きたれば、他物を措くこと最易し。又、福樂、光榮を措きて、天主の聖旨に翕合し奉れば、著しき功ある可けれども、若くば二十年、若くば三十年の後、享け奉らん眞福は、今、享け奉る眞福より大なりと、知れども、天主の聖旨に從ひ奉りて、大を措き、小に就くは、更に著し。又、今、死すれば、天福を享け奉ること、確乎なれども、猶苦を嘗めさせ、憂ひ凌がせんと、天主思し召し給はゞ、其思し召しに從ひ奉らんは、更に著し。故にこそ、ダビト聖王は、主よ、主は、吾光榮となり給ひて、余に首を昂げさせ給ふ」とは(Ps. 3, 4)日へりけれ。

四　聖者イゴナシオの遺表ぞ、善く此章の義を證するなる。聖者、一日、師父ジアコブレイニオ等と、會談しぬ。聖者、機を得て、問ひて曰く「天主、鄉に、鄉の存亡を一任して曰ふ「汝、亡して、永遠、無究の福樂を享けんと、欲すれば、享けさせん。猶存へんと欲すれば、存へしめん。然れども、存へて、德を脩めて、善に進まんか、罪を犯して、惡に陷らんか、定ならず、唯、死候の境遇に

に由て、我汝の進退を定めん」と曰はんに、鄉若し、猶存へて、著しく德を脩め、潔く天主に事へ奉り得んと、知らば、如何せん」と云へば余直に天主の尊前に進み奉りて、眞福を享け、危險を脫れて、救靈を確にせん」と曰へり。聖者曰く「余は、然らず、若し存へて、潔く天主に得事へ奉らんと、知らば「存へしめ給へ」と、天主に請ひ奉らん。存へしめ給はゞ、專ら意志を天主に向け奉りて、自己をも、他人をも、顧みず、救はるゝと、救はれざるとを想はず」と（L. 5. c, 2. vitae）云ひしとぞ。聖者は、死ぬれば、必ず救はれんと、確に知りつらめども、直に死して、功勞の報賞即ち、眞福を享けて、樂まんよりは、聖旨を行ひ、天主に事へ奉らんと、欲せしなりけり。聖者謂けらく「王、功臣を賞し、高位に進め、高爵を授けんとす。臣は、固く辭じて受けず、愈々大功を樹てんと欲して、愈々王事を勤めば、王、其忠心に感して、如何か愈々高位に進めざんや、いかでか愈々高爵を授けざらんや。吾曹は、日々天主の大恩を蒙り奉りて、謝することを知らざれども、天主は、毫も厭ひ給はずして、更に益々巨大の恩惠を加へ給ひて、眞福を賞し給ふ。吾曹も、王臣に倣ひて、益々天主に事へ奉らんと欲して、賞し給ふ眞福を、辭み奉らば、天主、如何か益々篤く賞し給はざらん。其尊前に到りて、樂しみ奉らん時期を、延ばすとも、天主は、吾曹を放棄し給ひて、大惡に陷らしめ給はんと、恐るる理、豈わらんと謂へらんかし。

第卅一章　完愛を以て、天主と和親し奉りて、聖旨に翕合し奉る細密の工夫。

一　天主の聖旨に翕合し奉る脩行の、含む完德と、此脩行に據て、吾曹の進み得可き德域とを、明にせんと欲して、師父等の貴重し、愛主の脩

行を述べて、此編の局を結ばん。抑々吾曹は、天主の聖旨に翕合し奉りて、天主を愛親し奉らずば、ある可からず。聖者ヂョニジオ曰く「相愛する者等の、旨を一致するより、最大なる愛なし」と(C. 2. divin. nom.)云へり。斯れば、吾曹は、愈々天主を愛慕し奉れば、愈々聖旨に翕合し奉る。聖旨に翕合し奉ること、愈々密なれば、愛慕し奉ることも、愈々密なり。此義は、天上の聖者等、聖女等の、天主を愛慕し奉る狀を、熟考すれば、明なり。天上の聖者等、聖女等は、天主を愛親し奉りて、其聖旨と均しき旨を有ちて、天主の欲し給ふことを、自ら欲し奉るなり。吾曹若し、此意念に熟すること、愈々、完全なれば、此脩行も、愈々完全ならん。使徒ジョアンは、天上の聖者等、聖女等の、天主を面に視奉りて、天主に似聖る由を、述べて曰く「天主、光榮を以て、吾曹に現はれ給はゞ、吾曹は、天主を如在に視奉りて、天主に似奉らん」と(1 Ioan. 3. 2.)云へり。天上の聖者等、聖女等は、天主を面に視奉りて、其愛に

化せられて、天主の欲し給ふことを、自ら欲し奉るなり。天主の聖旨は、如何、親愛は、如何と、推知し奉れば、聖者等、聖女等の旨は、如何、愛は如何と、推知し得て、吾曹は、自ら、如何なる旨を有ち、如何なる愛を養ふ可きかも、容易に推知し得ん。抑も天主は、自己の無究、無比の光榮を視て、親ら篤く願望し給ひ、本性の完全、無欠の善美を視て、親ら單に愛慕し給ふ。聖者等、聖女等も、天主の無究、無邊の光榮と、本性の完全、無缺の善美とを、視奉りて、天主は、全善、全美、全能、全智に在して、尊敬として、應はざるはなく、拜禮として、及ばざるはなく、讃美として、適はざるなしと、認めて、心情を盡し、思力を極めて、愛慕し奉るなり。天主こそ、自ら篤く願望し、自ら專ら愛慕し奉る可き聖主なれと、認め奉りて、惘然として樂しみて、歡喜、踊躍するなり。吾曹の思力は、微弱なれども、天上の聖者等、聖女等の、獲て樂しむ福樂に、彷彿たる福樂を、想像し得んこと、難からず。譬へば子あり、温良、順孝に

して、篤く父を愛慕す、父の富貴、榮耀、聰明、深智にして、上は、君王の寵恩を享け、下は、人民に愛戴せらるゝを見れば、歡喜、踴躍して、已を忘れん。世人の愛情は、最微なり。世間の福樂は、虚榮なり。然れども、孝子は、父の威權、榮耀を見て、完喜、踴躍して、已を忘る。況や、天上の聖着等、聖女等の、全善、全聖、全能、至尊の聖父にて在す天主の、愛情の無限、福樂の圓滿を、面に視奉るに於てや。必ず聖愛に化せられ奉りて、惘然として、己を忘れんかし。此歡樂は、使徒ポーロは「天主の親を愛慕し奉る人に、備へ給ふ福樂は、目未だ見ず、耳未だ聲かず、心未だ思はず」と（2 Cor. 2. 9.）曰へり。使徒ジョアンは「神と羔の寶座より、出づる浩水の川」と（Apoc. 22, 1.）曰へり。ダビド聖王は「川の流は、天主の邑を歡ばしむ」と（Psal. 45, 5.）詠へり。聖者等、聖女等は、肅然として、此川に臨み、恭然として、此水を飲みて、渴を鎮め、主の聖愛に醉ひては、天主を讃美し奉りて「吾全能の天主、治め給へば、吾曹は、歡喜、踴躍して、光榮を天主に歸し奉らん」と（Apoc. 19, 6. 7.）詠誦すなり。又、天主の弘大、全邊の光榮を、視奉りては、喜躍し奉りて祝福、光榮、叡智、感謝、尊敬、威權等は、世々天主に及奉れ」と（Apoc. 7. 12.）讃誦すなり。

二　吾曹の明悟は、最微し。此明悟を以て、天上の聖者等、聖女等の、天主を欽崇し奉る愛は、如何に、天主の聖旨に翕合し奉る狀は、如何と究めて、天主の聖旨の、天にて、聖者等に行はれ給ふ如く、地にても、吾曹に行はれ給はんことを、欲するなり。往昔、天主、モイゼスに聖櫃を、造らしめ給ひて、曰く「我、山上にて、汝に示し〻規摸に式りて、造れ」と（Exod. 25, 40.）云へり。吾曹は、光榮の山上即ち、天上にて行はるゝ事を、規摸として、萬事行せざる可からず。即ち、聖者等、聖女等の、常に愛しみ、常に欲することを、常に愛しみ、常に欲し、天主の專ら愛しみ、單に欲し給ふ物を、專ら愛しみ、單に欲し奉らざる可からず。聖者、聖女等は、常に天主を愛しみ奉り、天主の聖旨の、天

にも、地にも行はれ給はんことを、常に欲するなりかし。天主は、親の廣大、無邊の光榮と、完全、無上の本性とを、親ら專ら愛しみ、親ら單に欲し給ふなりかし。

三　既に述べたる事を、容易に行はんと欲すれば、其方法の大略を、知るべ、緊要なる。吾曹、祈禱、默想せば、全智、全能、全善、永遠、無邊にして、光榮、福祉、極なく在す天主の尊前に、明悟を進め奉りて、無始より存在し給ひ、無限の美好を有ち給ひ、萬物を占め給ひて、他には須要在さず、善と聖とに滿ち、威嚴と光榮とに溢れ給ふ本性と、完全、無欠の性德とを、精忠に熟察し奉りて、歡喜、踴躍せざる可からず。聖者トマス、監他の神學師等の說に據れば、此行爲を措ては、吾曹の、天主を愛し奉る盤大、完全の行爲なし。(S. Th. 2. 2. 9. 28. art. 5. ad 3' et art. 2.)。然らば、此行爲は、吾曹の、天主の聖旨に翕合し奉らんとする脩行中にて、最上、俊高の脩行なり。蓋し、天主の、其完

全、無欠の光榮と、至福、至幸の本性とを、親ら慕ひ給ふ聖愛、聖旨より、更に完全、無欠なる聖愛もなく、聖旨もなければなり。斯れば、天主の親ら慕ひ給ふ愛に、吾曹の、天主を慕ひ奉る愛の、愈々似奉れば、天主の聖旨に吾曹の翕合、親結し奉ることも、愈々完全なり。哲學士等の說に據れば(Arist. L. 3 Rhet. c. 4.)某を愛するとは、其爲、福祉を願ふことにこそあれ。然らば、吾曹は、若し某の爲、福祉を願ふこと、愈々切なれば、愛する事も、愈々切なり。吾曹は、萬物の爲、完善を願ふこと能へども、天主の爲、其既に有ち給ふ完善即ち、全善、全智、全能、全福の性德を、願ひ奉ること能はず。蓋し、萬物は、漸々成長し、漸々整頓する物なるが故に、吾曹は、曾、其有てる美善をのみ、祝賀して、喜ばず、未だ有たざる美善をも、願ひて喜べども、天主は、完全、無限に在して、德として、有ち給はざるはなく、善として、備へ給はざるなければ、更に德と善とを、增長し、整頓し給はんことを、願ふこと能はざればなり、

故に吾曹は、天主の吾曹に對し、給ふ完大の善を願ひ奉れば、吾曹の愛も益々完大となりて、天主を慕ひ奉りて、有ち給ふ無限の善を祝賀し奉りて、樂しむなり。

四　耶蘇基督の人性と、聖母と、聖者等、聖女等、天使等とは、全善、全美に在す天主を、面に視奉りて、恒に、永に歡喜、踴躍せり。心に溢るゝ歡喜を、常に行爲に表はし、音聲に發して、丹精を盡して、讃美し奉れり。言へることあり「主よ、主の聖殿に、住み奉る者は、福者なり。永に主をぞ讃美し奉らん」と（Psal. 83, 5.）なり。聖會も、聖母、聖者等と、均しく、天主を頌揚し奉らんことを、吾曹に敎へて「彼曹と、心言を均しくして「萬軍の主、天主、主は、聖し、聖し、聖し。天にも、地にも、主の光榮は滿つ」と、詠はしむ。然らば、吾曹は、天主の全善、全能、光榮等を、祝賀し奉りて、歡喜、踴躍して、天主を讃美、頌揚し奉れば、地上に在れども、天上の福者等にも似、天主にも肖奉りて、漸々愛の上域に進みて、完全、無缺に、天主の聖旨に翕合し奉らんこと、凝なし。

第卅二章　聖書に因て此脩行を奬勵す。

一　此脩行の事の、聖書の諸處に見ゆるは、高妙にして、善く天主の聖旨に協ひ、又善く適宜の題目を與へて、實行せしむ。ダビド聖王曰く「正義の人よ、爾曹、主に欣喜、歡躍し奉れ。正直の人よ、爾曹、主を尊崇し奉れ」（Psal. 31, 11.）。「正義の人や、爾曹、主に踴躍し奉れ」（Psal. 32, 1.）。「主に歡樂し奉れ。主は爾の心の求を、待せしめ給はんと」（Psal. 36, 4.）云へり。吾曹も、主に歡喜、踴躍し奉れば、主は、吾曹の願望する事物は、更なり、他の必要なる事物をも、必ず與へ給はん。蓋し、此歡喜は、一種の祈禱にして、善く天主の聖意を感動し奉れば、吾曹の、特更に請はざれども、天主は、吾曹の心の願望

を、必要なる事物をも、皆賜ひ給へばなり。使徒ポーロ、ヒリッポ人等に、勸告して曰く「爾曹、恒に、主に歡樂し奉れ」と（Phil. 4, 4.）云へり。事、重要なれば、唯一たび勸告すとも、足らずと思ひて、更に勸告して曰く「余、復、爾曹に曰ふ、主に歡樂し奉れ」と云べり。聖母の、聖女エリザベットを訪ひて「吾靈は、吾救主、天主に踴躍し奉る」と（Luc. 1, 47.）詠ひて、發しゝ踴躍も、耶蘇基督の、弟子等の宣教して、歸るを見て、發し給へる歡樂も、ダビド聖王の、發しゝ歡喜も、使徒ポーロの、勸告しゝ歡樂も、此踴躍、歡喜、歡樂と、同一の踴躍、歡喜、歡樂なりき。聖史ルカ曰く「耶蘇は、聖靈に歡喜し給へり」と（Luc. 10, 21）云へり。ダビド聖王は、天主の光榮の、弘大、無邊にして、萬民擧て、慶賀、讃美し奉るとも、猶足らずと視て、默止すること能はず、手の舞ひ、足の踴るを知らずして、曰く「吾心、吾身は、常生の天主を歡呼し奉りぬ」と（Psal. 93, 3.）云へり。又曰く「吾靈は、主に欣喜し奉らん。其救主に歡樂し奉らん。吾骨は、主よ、誰か、主に肖奉る」と曰はんと」（Psal. 34, 9-10）云へり。天主に歡喜、踴躍し奉ることは、天主を慕ひ奉る高妙の愛なることを、聖會は、聖靈に依り奉りて、認めて、自ら認めし如く、吾曹にも、認めしめんと欲して、ダビド聖王の詩を以て、定時課の首に、誦へしむ。其詩に曰く「來れ、爾曹、聖主に踴躍し、救主、天主に謳歌し奉らん。主の尊前に進み奉りて、頌美を誦へ、讃歌を詠ひて、天主を歡呼し奉らん。主は、大み神、大み主に在して、諸の神、諸の主を、超え給へばなり。海は、主に屬せり。主は之を造り、又其手は、乾土をも造り給へばなり」と（Psal. 94, 1…）云へり。此義に基きて、聖詩の結何にも、誦へしめて曰く「聖父、聖子、聖靈に光榮あれ。初に在りける如く、現時も、何時も、又世々に」と云へり。斯てぞ吾曹は、天主の有ち給ふ全能、全智、全善、光榮等の性德を、天主と均しく歡喜、踴躍し奉りて「主の歡喜に入り奉る（Matth. 25,21）。

二　吾曹は、此靈樂を以て、更に心情を養ひて、此脩行の玄奥に、更に高く進まんと欲すれば、天主の全善、全美、光榮等の性德の如何なるかを、細に究めざる可からず。此性德は、圓滿、無缺、廣大、無邊に在して、吾曹にして、僅に視奉らば、眞の福者となり、永苦に刑はるゝ者にして、視奉らば、永苦は、安樂となり、地獄は、樂園とぞなる。故に、基督も曰く「唯一にして、眞誠の天主よ、爾を認め奉るぞ、常生なる」と（Joan. 17, 5.）云へり。天上の聖者等、聖女等は、天主を眞に認め奉り、面に視奉ればこそ、樂しめ。其認め奉り、視奉ることは、永遠絶ゑざれば、其樂も、永遠絶ゑず。新舊常に改まらず、澁滯せざれば、樂も常に新なり。斯ればこそ、使徒ジョアンは「新歌を、常に詠ふ」と（Apoc. 14, 3.）曰へれ。已上述べたる事は、吾曹に、天主の善義、完德、光榮、威嚴等を、明に視せしむれば、更に述ぶ可き事なけれども、其善美、完德、光榮等は、圓滿、無缺に在せば、此を細に述べんとするも、歳月足らざるなり。

第卅三章　前章の意義を愈々推廣す。

一　耶稼基督の人性を、考究し奉りて、歡喜、愛慕すれば、此脩行を、愈々推廣すること難からず。吾曹は、耶穌基督の人性の、歡美を極め給へることを、推究し奉りては、欣々焉として、歡喜し奉らん。耶稼基督の人性の、天主の第二位に親合して、一位となり給ひ、聖寵に溢れて、光榮を極め給ひ、天主の人に得せしめんと、欲し給ふ天堂の眞福と、降さんと、欲し給ふ起性の恩惠との、器となり給ふことを、觀察し奉りては、愉々然として、抃舞し奉らん。耶穌基督の身体と靈魂との、享け給ふ完善、全榮等を、熟視し奉りては、洋洋乎として、怡悅し奉らん。耶稼基督の、凱旋して、死者の中より復生り給ひしを、見奉りては、聖母瑪利亞の如く、慶喜し奉り、太祖ジョセ

フ、エヂプトの副王となりて、富貴、尊榮を極むと聞きて「ジョゼフ、未だ死せずば、余、往きて見ん」と（Gen. 45. 27-28）曰ひて、恍惚たりし太祖ジアコブの如く、踴躍し奉らん。

二　此俯行を、聖母瑪利亞、聖者等、聖女等の蒙れる光榮、眞福に適用すれば、又愈々推廣し得ん。抑、聖母瑪利亞、聖者等、聖女等の膽禮日に、祈禱、默想して、其光榮、眞福を愛慕すれば、最大の信心ぞ發る。蓋、此等の光榮、眞福を祝賀して、共に歡樂すれば、彼等を慕ふ最大の愛を證せはなり。故に聖會は、吾曹に、聖母の光榮を、祝賀せしめんと欲して、被昇天の膽禮日に、誦へしめて、曰はしむらく「今日、童貞瑪利亞は、天に昇りて、基督と永に治め給へば、爾曹、歎樂せよ」と、云はしむ。聖祭起頭の經中にも「吾曹は、福者童貞瑪利亞を慶賀して、此膽禮を行ひ、天主に感謝奉らん。天使等も、此被昇天を慶賀して、天主の聖子を讃美し奉ると、讃賀せしめて、此俯行を、奬厲す。耶蘇基督曰はく「我は、道なり、門なり。我に由らずば、聖父許臻り奉る者、一人もなし」と（Joan. 16, 9. et 14, 6.）云へり。耶蘇基督は、親ら靈俯の道となり、門となり給へば、吾曹は、聖者等の享榮と、特に耶蘇基督の人性の光榮とを、慶賀し奉らば、心、漸々奮揚して、容易に、天主の本性の善美をも、慶賀し奉り得ん。

三　此俯行は、天主の本性の、萬古、不易の聖德に由れども、吾曹の智慮に應ひて、萬物の狀態より初り、漸く天主の本性に及びて、俯る者なれば、他業と、均しく漸進す。天主の本性は、無邊の福樂を極めて、圓滿、無缺に在せば、吾曹は、其內容の光榮を願望し奉りて、更に增加し奉ること能はざれども、外附の光榮を增加し奉ることは、能はざるにあらず。卽ち、天主を認識し奉ること、愈々深く、愛慕し奉ること、愈々篤く、讃美し奉ること、愈々誠なれば、其光榮も、愈々增加し給ふ。斯れば吾曹は、心意を誠にして、天

主を益々深く認識し奉り、益々篤く愛慕し奉り、益々敬しく讃美し奉りて、外所の光榮の增加し給はんことを願望し奉らば、天主を畏愛し奉る行を、脩むるなり。吾曹は、天主の、全善、全美に在して、恭敬として、應ひ給はざるはなく、愛慕として、及び給ざることなければ、萬物、必ず畏愛し、服事し奉らざる可からざる理を、默想を以て認むれば、即ち、天下の過去、現在、未來の人々の、深く天主を認め奉り、篤く愛慕し奉り、眞に讃美し奉らんことを、願望して曰はん「主よ、普世の異教者に、眞に主を認識せしめ奉り、罪人に、篤く改心せしめて、皆、主の命に從はしめ、一人も、罪を犯して、主を背き奉る者、なからしむる者は、實に福者なり」（主の聖名は、尊崇れ給へ」（Matth. 6, 9）。「地は、主を拜崇し奉れ。主を謳歌し奉れ。主の聖名を頌讃し奉れ」と（Psal. 65, 4.）云はん。斯て、吾曹は、天主に盡し奉る本務、願望を推廣せん材料を、多く收め得ん。

四　吾曹は、己に歸りて、天主の聖旨の行はれ給はんことを、篤く願ひ奉り、天主の讃美せられ給はんことを、切に勉めざる可からず。斯て、耶蘇基督を倣ひ奉りて、天主の讃美せられ給ひ、天主の聖旨の行はれ給はん事業は、餘さず、欣然として、行はん決志を立てざる可からず。吾主基督曰く「我は、恒に、彼の善し給ふ事を、爲す」と（Joan. 8, 29.）云へり。使徒ジョアン曰く「天主を識ると言ひて、其聖誡を守らざる者は、識者なり。眞理、其衷にあらず。天主の聖言を遵る者にこそ、天主の完愛はあなれ」と（1 Joan. 2, et. 5.）云へり。斯れば、吾曹は、誠心、精意、天主を愛慕し奉りて、完く聖旨に翕合し奉らんと欲して、其全善、全美を推究し奉りて、樂しみ、萬物にも、愛慕し、讃美し奉らしむとも、天主の聖旨を行ひ奉らん目的を以て、身靈を全く供へて、心力を悉く盡さゞれば、天主を讃美し奉らんと欲すとは、言ふ可からず。此脩行は、吾曹の、默想中、念頭に現はるゝ事物には、天主の聖旨を

行ひ奉らん決志をなし、願望を發す時、脩むる行なり。

五　吾曹は、此脩行に、心力を、悉く抛ち盡さんと欲して、沃饒、廣漠の地に入りて、完德、靈利を治く探りて、細に述べたれば、實賤、躬行して、永に反復して、天上に行はんことを、預め地上に行ひて、天主の愛火に熱らざる可からず。然れども、預言者イザイア曰く「天主の火は、シオンに在り、其爐は、ゼルザレムに在り」と（Isai. 31, 9.）云へり。然らば、ゼルザレム即ち、天上の府に到りて、眞福を享け奉らざれば、眞に熱まること、能はざらん。

脩德指南卷ノ二終

明治三十五年六月十五日印刷
明治三十五年六月廿五日發行

定價金六拾錢

譯述者　長崎縣長崎市南山手町乙一番地　片岡謙輔

印刷者　長崎縣南松浦郡久賀村三百六十五番地　脇田淺五郎

印刷所　長崎縣長崎市本五島町廿九番地　境活版工場

發行所　長崎縣長崎市南山手町乙一番地　私立羅典神學黌

版權所有

318
46